

TRIO

三重の文化・社会・自然

Vol.17
ISSN 1345-5079

三重大学大学院人文社会科学研究科 地域交流誌 [トリオ]

特集1 鼎談
三重の観光
特集2 三重県の研究
桑名市

TRIO Vol.17 CULTURE, SOCIETY and NATURE in MIE
published by Graduate School of Humanities, Law and Economics, MIE UNIVERSITY, Japan.

大学院のご案内

人文社会科学研究科は、人文社会科学の諸分野の高度な専門知識にもとづき、広く学際的・総合的な教育研究を行うことにより、複雑化・多様化する現代社会に柔軟に対応でき、創造的な知性と国際的な視野をもった研究者及び専門的職業人の養成をめざしています。専攻は地域文化論、社会科学があります。

社会人の受け入れを進めています

有職者は標準在学コース(標準修業年限2年間)のほか、短期在学コース(標準修業年限1年間)を選ぶことができます。夜間にも昼間と同じ科目を開講しており、勤務後に学ぶことができます。

長期履修学生制度があります

職業等に従事する学生が個人の事情に応じて、2年分の授業料で3年間あるいは4年間履修し、学位等を取得できる制度です。

募集人員は、地域文化論専攻8名、社会科学専攻7名です

一般入試、社会人特別入試(若干名)・外国人留学生特別入試(1名)を合わせた人数です。

修士課程 地域文化論専攻

地域文化論専攻は、世界の各地域に固有の文化を、高度な専門性ととともに学際性・総合性を視野に入れ、人文諸科学のさまざまな研究視点から探究することを教育研究の目的とし、地域文化の理解と発展に寄与しうる人材を育成します。

地域社会文化論専修

歴史学、思想、社会学、地理学、図書館・情報学および環境学等の授業科目を幅広く提供することにより、日本、アジア、オセアニア、ヨーロッパ、アメリカの諸地域における社会と文化について教育研究を行います。

地域言語文化論専修

日本、中国およびその周辺、ヨーロッパ、アメリカの言語と文学に関する授業科目を幅広く提供することにより、それぞれの地域社会における言語文化について教育研究を行います。

修士課程 社会科学専攻

社会科学専攻は、社会の諸問題を社会科学の視点から高度な専門性と幅広い視野をもって考究することにより、地域社会に貢献することを教育研究の目的とし、地域において指導的役割を發揮しうる人材を育成します。

地域行政政策専修

政治学、公法学、経済学(経済理論・経済政策)に関連する授業科目を幅広く提供することにより、地域の公共的な政策課題に関する教育研究を行います。

地域経営法務専修

経営学、民法学、経済学(経済史・経済学各論)に関連する授業科目を幅広く提供することにより、地域で活動する企業・NPO・市民の経済的・法的課題に関する教育研究を行います。

入試方法・試験科目

一般入試

- * 面接
- * 共通問題(小論文)
- * 専門科目1科目

社会人入試

・1年コース
・2年コース

- * 面接
- * 共通問題(小論文)
- * 専門科目1科目

留学生入試

- * 面接
- * 共通問題(小論文)
- * 専門科目1科目

入試方法・試験科目

一般入試

- * 面接
- * 専門科目2科目

社会人入試

・1年コース
・2年コース

- * 面接
- * 小論文

留学生入試

- * 面接
- * 専門科目1科目
- * 小論文

試験日程

2017年2月4日(土)・5日(日)

出願期間：2017年1月5日(木)～1月17日(火)

問い合わせ先

人文学部チーム学務担当：TEL 059-231-9197
Eメールアドレス：hum-gakumu@ab.mie-u.ac.jp

人文学部ホームページ

(<http://www.human.mie-u.ac.jp/>) から、大学院生のさまざまなメッセージを見ていただけます。

<http://www.human.mie-u.ac.jp/chiiki/trio/>

トリオのバックナンバーをご覧いただけます。

02	巻頭言	麻野 雅子	人生の円熟のために学問を
03	特集1 鼎談	三重の観光	田中功×石原義剛×小林康志
13	大川 吉崇	伊勢神宮から三重の観光を考える	
15	吉田 奈稚子	桑名の観光	
17	黒田 洋輔	観光の今と昔	
19	特集2 三重の文化と社会	桑名市 三重県の研究	豊福裕一・山田雄司
21	伊藤 嘉浩	桑名市におけるエネルギー政策の成果と課題	
23	岡村 三四郎	桑名市の自治体行政におけるPFI方式の活用の方	桑名市立中央図書館を事例として
25	黒上 久生	ことばの音声の獲得と地理的要因の影響	
27	和田 元樹	神身離脱における「神道」について	『多度神宮寺伽藍縁起并資財帳』などを手がかりに
29	丸山 優香	桑名郡における古代東海道の一考察	
31	稲垣 勝義	近世輪中地域の新田開発と洪水対策	宝暦治水の意義
33	萩井 真美	材木流通から見た桑名	廻船問屋佐々部家の史料から
35	豊福 裕一	資本主義の現在	資本蓄積の変容とその社会的影響
36	森原 康仁	図説経済の論点	柴田努+新井大輔+森原康仁編
37	山田 雄司	「もしも？」の図鑑	忍者修行マニュアル
38	杉崎 鉦司	はじめての言語獲得	「普遍文法に基づくアプローチ」
39	安食 和宏	三重の森林と林業	
41	嶋 恵一	マイクロデータによる設備投資の実証分析	
43	北川 眞也	地中海の真ん中で考えたこと	難民たちの生と死と「私」
45	大学院・学部の広報		
46	雑感／編集後記		

人生を円熟させるために必要なものは何だろう。その答えを、ある大学院生が教えてください。

彼女は、すでに修士号を取得され、現在博士課程進学の準備をされている。現在六十四歳、三人の娘さんを立派に育てられたのち、三重大学人文科学部に社会人編入され、大学院人文社会科学研究所へと進学された。

彼女の魅力は、なんといつても、純粹なる好奇心である。学問はもとより、娘さんより年下の学生たちの考えや行動にも興味津々で、眼をキラキラさせて、その姿をありのままに捉えようとする。これまでの人生経験から得た考えを押しつけない、謙虚な姿勢は、学生たちからも好評で、対等に接してくれる、話しやすい友人として歓迎されている。自分の考えに固執しない柔軟さと、今の自分の考えやその枠組みを壊していく新たな知を欲する貪欲さによって、大学生活、大学院生活を、そして人生の円熟期を豊かなものにされている。

そうした豊かな円熟期を生きる彼女には、心強い同志がいっぱい。彼女の旦那様である。旦那様は、薬品会社で研究者として定年まで勤められたのち、三味線に魅了され、今は様々な場所での演奏活動を展開されているそうである。

会社組織のなかで客観的な科学研究に取り組んでおられた旦那様が、魂の表現である音楽の世界で新たな楽しみを見つけたのと対照的に、専業主婦として、家族の心身のケアをされてきた

巻頭言

TRIO vol.17

人生の円熟のために学問を

麻野 雅子

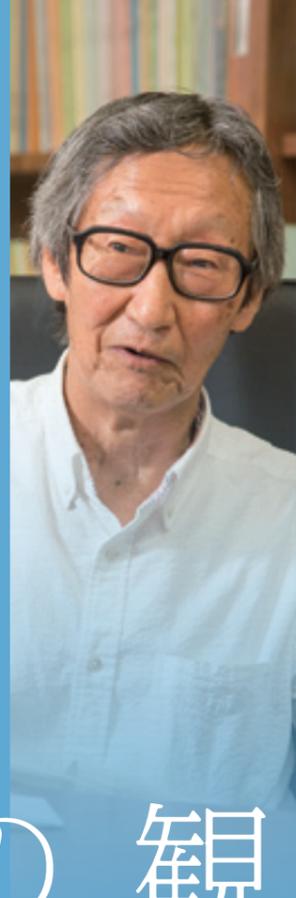
人文学部教授 政治思想史

彼女は、日本社会における認知症ケアのあり方について客観的な答えを出そうと、調査に出向き、現場を理解するとともに、先行研究を自らの視点で検討し直されている。

公私の区別を用いて表現すれば、ご夫婦それぞれが、公的世界から私の世界へ、私の世界から公的世界へと、ご自身の活躍の舞台を移され、そこで新たな楽しみを発見されていると言えるだろう。より世俗的に表現すれば、左脳から右脳へ、右脳から左脳へ、その比重を変えることで、与えられた脳全体を活性化させておられるのかもしれない。思考を鍛えることと感情を表現することを対比的に考えるのなら、人は、人生の円熟期に、比較的軽視してきてしまった、もう一つの営みに向き合いたい、そのことで自分自身の生を全うしたいと思うのかもしれない。

三重大学大学院人文社会科学研究所は、自らの生の意味を探究し心の叫びを表現するための学問も、文化や歴史、社会の仕組みを理解し徹底的に思考を鍛えるための学問も用意しています。人生の円熟期に差し掛かる皆さん、これまでの人生のなかで「影」となりがちだった自分の能力に光を当て、人生の円熟を実現させてみませんか。また、これから人生の基盤を作っていく皆さん、徹底的に思考を鍛える、あるいは、自分の心を見つめることで、自分らしい人生を全うするための一歩を踏み出してみませんか。人文科学、社会科学の学問には、人生の円熟を実現させる力がある、そう信じて、皆さんをお待ちしています。





三重の観光

鼎談

三重県雇用経済部観光局局長
田中功

海の博物館館長
海女振興協議会会長
石原義剛

伊賀市産業振興部観光戦略課課長
伊賀流忍者観光推進協議会会長
小林康志

司会者／山田雄司 三重大学人文学部教授

これまでの取り組み

山田 本日はお忙しい中、私ども大学院の雑誌「TRIO」の鼎談にお集まりいただき、ありがとうございます。昨今、国としても、多くの外国人に日本に来て観光してもらおうということで、インバウンドに力を入れていますし、県としても知事さんがさまざまな観光行政を推進し、中でも海女と忍者に力を入れて三重県の観光を盛り上げていこうとしています。その効果が現れて、三重県全体が活性化してきているのではないかと思います。今日はお三方の立場からいろいろお話を伺えたらと思います。

それではまず最初に、三重県雇用経済部観光局長の田中さんより、三重県としてどのような観光行政をこれまで行ってきたのかということについてお話をお願いします。

田中 私は2015年4月から観光局に参りまして思いましたのは、観光といてもいろいろな施策を行っているということ。鈴木知事自身も、三重県の観光はまだまだ力を発揮できていないという前提で、力を入れれば伸びると。三重県観光キャンペーン「実はそれ、ぜんぶ三重なんです！」を平成25年から展開しており、キャンペーンの目玉企画で

ある周遊バスポート「みえ旅バスポート」を使って周遊してもらったり、滞在時間を長くすることによってたくさん消費してもらおうことで、観光が基幹産業としてきっちり回るような規模になってほしいと思っております。その結果、「みえ旅案内所」が100ヶ所以上、「おもてなし施設」が880施設以上に伸びてきて、着実に根付いてきていると考えています。

また、インバウンドに向けた取り組みですけれども、世界最大の旅行口コミサイト「トリップアドバイザー」と連携して、旅館とか観光地へ行ってもらったら、その印象を書いたらって口コミを増やして満足度を上げていきたいと思っております。今、「トリップアドバイザー」の中での満足度は、三重県は47都道府県中44位なんです。ですから満足してもらってないんですね。それを年度内には20位以内にまで上げていこうと取組んでいるところで。

外国人に向けてはWi-Fiや免税店、案内表記ですね。案内表記には補助金等も出しながら取り組んでいます。免税店は昨年の10月1日には313店舗まで増えて、店舗数分の登録店舗数というのは三重県は全国第15位ということで、決して進んでないことはないと考えております。「三重」とかけた「3Eキャンペーン」

も展開しました。外国人で三重県への旅行をネットなどで申し込んでもらったから、宿泊の半額を補助するとか商品券を配付するというものです。

三重県が他の県と比べて特に海外に魅力を発信できるものは、海女、忍者、食。例えば松阪牛ですね。あと、鈴鹿F1などもあって、世界的に通用するものを強く売り出すことによって県トータルの観光の振興を進めているところです。

山田 ありがとうございます。それでは次に、海の博物館館長で、海女振興協議会会長の石原さんからお願いします。

石原 皆さんが観光と考える場合は、どうしてもお客さんと呼んでくるという、ツーリズムという言葉で考えようという部分が多いように思っていますよ。僕はそうじゃなくて、もっと広く観光というのを考えていかなきゃいけないと捉えています。

海女振興協議会は、基本的には観光的観点でつくったものではないんです。三重県の海女は素晴らしい文化であるにもかかわらず衰退していつているわけです。それを産業的にも支えなきゃいけないですね。僕は環境とか共同体の維持とかいろいろな意味から、海女文化を三重県でしっかりと根付かせて、なおかつ再生していかなきゃいかんという考えで、海

女さんに集まってもらって、鳥羽市・志摩市と民間団体も加わって海女振興協議会が動き出しているわけです。

以前は26県あったんですけど、だんだん減って今18県に海女がいます。その中で、三重県の海女の歴史は非常に古いんです。江戸時代には浮世絵という手段で、日本はもとより世界中から注目を浴びたわけですね。明治になると写真家が注目し、ミキモト真珠と海女とが結びついてきました。戦後になると海女さんたちが外に出て行くというような広がりも持つわけです。だから、海女というのは生業でありながら、なおかつ外から見ると観光というものとある程度結びつきながら発展してきたという特殊な面を持っているんですね。そこそこをこれからどう生かしていくかが大切なポイントだと考えています。最近海女を客寄せパンダにしようという傾向が非常に強いものから、これはちょっと困ったことかなと思っております。どこまでは観光的部分を伸ばして、どこは止めとくか。基本的には海女が生業の産業であるというところが、僕は限界点だと思っています。

山田 ありがとうございます。それでは続きまして、伊賀市産業振興部観光戦略課課長で、伊賀流忍者観光推進協議会会長の小林さんお願いします。



小林 私は観光戦略課という部署に所属していますが、これからの観光行政を戦略的に考えようとする、国内観光客とインバウンドの観光客との需要を分けて考えなきゃいけないと感じています。日本の方は伊賀が三重県にあるというのを存じないのが残念なところです。外国の方は忍者は知ってるけれども、忍者イコール日本、忍者イコール伊賀というのがおわかりになっていないということ、まず外国人の観光客に対しては、忍者は日本です、三重県の伊賀が本家本元ですとアピールしていきたいと思っています。その一環で今年6月末にはミラノ万博に出展し、キャンペーンを大々的にやらせていただいたんですね。

ちよつと手応えを感じてますのは、最近目に見えてFITというんですが、海外からの個人観光客が増えてきました、欧米系の個人旅行の方がたくさん町の中を歩いていらつしやるんですよ。どこから来たんですかと聞いたら、ポーランドとか、フィンランドとかおつしやるんですね。ですから、インバウンド向けは忍者を全面に押し出してPRしていきたいと思っています。

国内向けに関しては、社会の成熟度に応じて観光需要は変わってくると思うんですよね。日本では昭和50年代くらいま

海女と忍者

山田 ありがとうございます。海女と忍者では、同じ観光といってもちよつと違うんだなということが言えると思います。県として観光行政を特に海女と忍者で積極的に進めてもらってますけれども、それを進めていく前と現在とではどのように変わったのかという点についてはいかがでしょうか。

石原 海女にとつては、基本的には観光意識はないですね。今まで海女さんたちは外へ開いてなかったんですね。2009年に全国の海女さんに来てもらって海女サミットをやったんですよ。たぶんそれが初めて全国各地の海女同士が話し合う機会だったんでしょうね。今まで5回積み上げてきているんですけど、その間に全国の海女同士が情報を共有したわけですね。隣にこんな人がおるとか、こういう技術を持つととか、隣ではこういう約束事で漁をしたらとか、いろんな事がわかってきたんですね。それで海女さんたちが自信を持ち出したわけです。NHKの「あまちゃん」がちょうど時を同じくして放送されたんですけど、それから、抜群に知名度が上がって、世間的にも知られるようになった。そうすると、今度はどういふふうになにかして



1. 海女小屋
2. 韓国の海女との交流
3. 御潜神事
4. プダベスト(ハンガリー)忍者講座
5. 忍者衣装で観光する外国人観光客
6. パリ日本文化会館忍者講座

では、町内会の旅行とか職場の旅行とか観光バスの団体旅行が主流だったのが、だんだん個人旅行が変わってきて、個人のきめ細かいニーズに対応できている観光地が残っていつていると感じています。ですから、国内の観光客に向けては、いろんな体験型、学習型のメニューを提供するシステムをつくっていくようにしています。そういう意図で始めたのが、昨年から始めた「伊賀ぶらり体験博覧会」略して「いがぶら」です。今まで直接観光と関係なかった農業者とか、商業者とかNPO法人とか、地域の自治会とか、時には福祉の関係の方とか、そういう方におもてなしのメニューを沢山考案いただき、ガイドブックにまとめて一定期間集中的に伊賀市をPRしてお客様に提供するシステムを構築しています。そして伊賀のファンづくりをしていきたいと思います。そのファンの方々に、口コミで「伊賀おもしろいよ」「伊賀ついでいいところだよ」と言っていたらいい気持ちの部分でつながる、そういう観光地を国内向けに対しては目指していかなきゃならないような社会の成熟度に日本はなっていないのかなと感じています。ですから、国内向け、国外向けに分けて戦略を考えていこうと思っています。

山田 忍者の方も近年人気が高まって、日本各地でいろいろな取り組みがなされてきていると思うんですけども、そうした中で忍者をどのように考えて、これまでやってきて、そこでの問題点などありましたらお願いします。

小林 三重県のご支援で、名張市・伊賀市・三重県・三重大学が連携して、伊賀流忍者観光推進協議会という組織を立ち上げていただきました。そこで気づいたのは、今まで忍者は伊賀のものだと思っただけで、広く国内外に発信していくことと思うと、やっぱり三重県の忍者みたいな形にして広域的に宣伝していかないと、伊賀だけでやっていたのでは限界があるということです。もう一つありがたかったのは、三重大学人文学部のご尽力で伊賀連携フィールドを作っていたので、山田先生が学術的に忍者研究を本格的に始めてくださって、国内外で精力的に研究成果を発表していただけた。これによって忍者の実像はどうだったのか、学術的なエビデンスが明確になってきたという点です。それが無いと作り話になってしまうから、ミラノの万博で忍者ショーとかやらせていただいても、特にヨーロッパの方



は深く知りたいですよね。単にアクション見てもおもしろいとか、そうじゃないかと、なぜ黒い服を着ているのかとか、なぜ武器に農民が持っている鎌を使うのかとか、そういった掘り下げた質問をされるんですよ。そこを学術的にご研究いただいたおかげで、忍者を国内外に発信する際説得力が持てるようになったと。そこは大変感謝しております。

が、私は忍者について関わらせていただいておりますし、海女の方は塚本先生が中心になって研究されているということ、大学が地域と共同してできる素材として、海女と忍者というこの二つはよかったなと思っております。この二つを県として支えていこうと考えられたのはどうしてなのでしょう。

田中 三重県が他の県に比べてアピールできるものが何かというと、自然がきれいであるとか、食べものがおいしいとか、そういうのはありますけれども、歴史・文化に根づいた上で発信していけるストーリー性を持ったものというのは強いので、そうすると忍者・海女をクロージアアップして打ち出していく。これが生業の振興にもつながっていくかと思っています。

史・文化に根づいたストーリー性をきっちり語れるものにして、しっかり売り出して三重県の特徴にしていきたいと考えています。

石原 伊勢志摩の海女は長い歴史の中で伊勢神宮と密接に関わり、伊勢神宮にアワビを奉納するという歴史が基本にあるわけです。海女は海の中で自然と関わって、海女漁業を続けてきている。その海女が神宮へ海ものを差し上げています。それは結局、陸と海との大きな繋がりですよね。三重県の観光の中で非常に重要な問題は、食という問題。海で獲れた海産物が、どういうふうになっているか、提供できるかということがある。一番大事なアワビとかサザエとか一部伊勢エビ、あるいは海藻類を海女はたくさん獲っている。そのことが、今ほとんど忘れられているわけです。海女がクロージアアップされている。そうじゃなくて、海女が獲っているそのもののほうが、三重県にとって非常に重要なんです。これをもっと僕らは支えて、海女を元気にさせていこうという、そういうやり方を海女振興協議会の中で考えようとしているわけです。だから、三重県知事もそのところを気をつけてくれて、基盤整備のために少しお金を回してくれるようになったわけですけども。そこをきっちり支えて、海女さんがある程度振興させないと、海女文化は一遍に瓦解してしまう危険性をもっているわけです。ここを考えるとほしいなと思っております。

観光の周辺

山田 観光というどうしても観光客をどれくらい集めるかという、そういう方向にいつてしまっていて、そこに住んでいる人の生業、山の保護、海の保護などの地道な面に一般市民も目がいかないというところがあると思うんですよね。その点、県として考えている政策がありましたらお願いします。

田中 他県から来た方とか外国から来た人に、三重県の良さをわかっていただけてお金も使っていた。それによつて農林水産業の従事者の生業も豊かにならなと、文化はすぐに失われていきますので、産業全体が回っていくようなことを考えていかなくてはならない。そのためには、消費額をいかに増やしてもらうかです。

今、宿泊客が3割切っていて、7割以上の方は日帰りで帰られるんです。それを1%、2%増やすことによつてずいぶん変わりますので、そういう対策をいかにとっていくかですね。あとは、周遊性とか滞在時間を伸ばせば確実に観光消費額が増えますので、そういう方向で考えています。我々が目標としているのは、岐阜の高山市です。高山市は20年前は半

三重県の観光の特色

山田 日本全体のいろいろな観光行政と比べて、三重県の観光はどのような特色があるかと考えたらいでしょうか。

田中 伊勢神宮は知っているけれども三重県がどこにあるかというのは、割と知られていない。そういう中で、いかに売り出していかかということなんですけれども、これまでの三重県の観光というのは、20年ごとの遷宮に大きく依存してきました。三重県の行政もそれに合わせて大きな事業をしてきたという遷宮頼みの観光だったわけです。しかし、もつと継続的に来てもらえるようなことを考えなければいけない中で、例えば忍者とか海女さんなど、他県の人や外国の方から興味を持ってもらえる部分については、県外や外国の人たちの要望にしっかりと応えていかなければいけないということで、歴

海女さんについては、石原館長が言われたように、生業なんですよ。アワビとかサザエを獲って生活をしてるわけですけど、ここまではいいよという部分に関しては積極的に発信していただきたいと思うし、海女さんの文化、忍者の文化というのは20年の流行り廃りがあるわけではありませぬ。そういう意味で遷宮頼みの観光から脱していきなと思ひます。

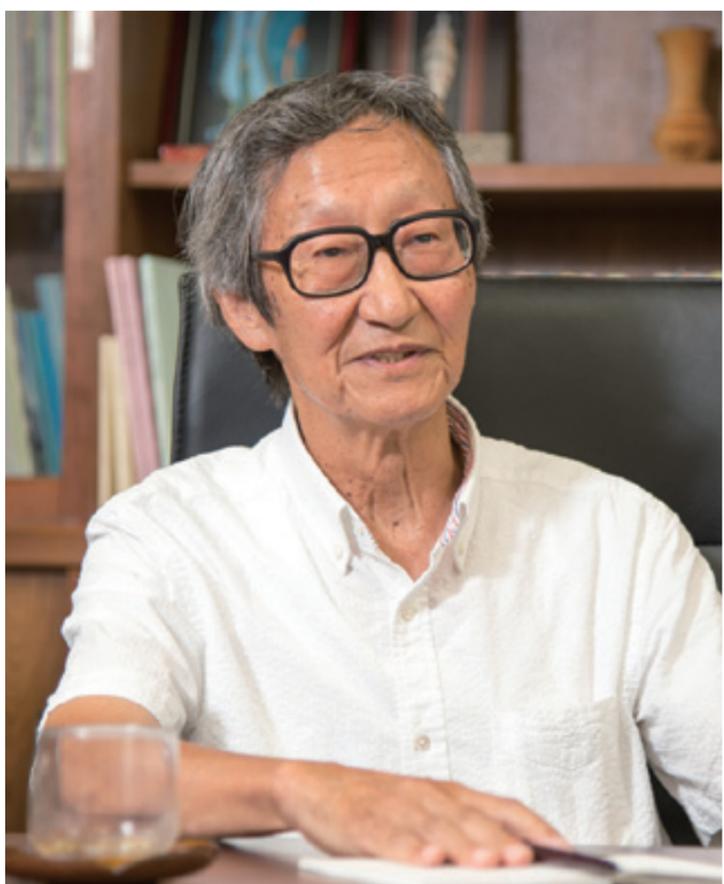
これまで、土産物屋さんには土産物屋さん、観光施設は観光施設、ホテルはホテルでそれぞれやってきて、体系的に攻めてなかつたんですね。ターゲットを絞るためにはマーケティングが当然必要ですし、そういうことのできる核になつてもらうのが観光協会であり、観光連盟であると思っております。そういう核を元に、農林水産業の生産者や飲食店などを巻き込んだ上で観光地全体で経営を考えることができないと厳しいかなと思ひます。今まで遷宮頼りだった観光を、持続可能な産業にしていきたいということで三重県は進めているところでございます。

径300mの町だったんですね。半径300mで周遊すると2時間しか周遊してもらえない。半径700mまでになると半日以上滞在していただけます。半日以上滞在していただくと消費も違うし、泊まってもらえる。半径1kmを超えると必ず宿泊してもらえらる町になるということで、一生懸命やっているという話を聞いています。そういう町づくりをすると、イベントをドンドンしていかな

くても人は自然と来ますので、そういう町づくりを目指して結果的に観光地を活性化させていきたいと考えています。

山田 伊賀でも宿泊する観光客が少ないということがありますし、それから、中心市街地が空洞化したりとか、いろいろな問題点があるかと思うんですけどいかがでしょうか。

小林 伊賀へ来られる観光客の方々は、忍者屋敷と上野城を見てくださいって、2



時間か3時間くらいで次の場所へ移動するというパターンが多いんですね。そこに市街地の周遊を加えたいと思ってるんですけども、市街地の周遊だけで半日くらいで終わっちゃう感じなんです。伊賀は城下町で、その魅力というのはお城があつて城下町があつて、その周りを農村部が取り巻いているわけじゃないですか。ですから農村部の魅力と町の魅力を組み合わせたような観光メニューを創出することが必要だと感じています。これは行政だけでできるものではないので、民間の方々にご提案差し上げて、城下町観光と周辺の農村部を組み合わせ、滞在時間を伸ばしていただいて、泊まっていたらどうか。そういった方向で皆さんとお話させていただいているところです。

山田 志摩の方ですと、観光客はどういう行動を観光ルートとしてとっているのでしょうか。

石原 僕が博物館やって45年になるんですが、初期の頃はほとんどバスツアーですよ。大勢の人がドーンと来てドーンと帰っていった感じですよ。今はそれがかなり変わってきて、個人のお客さんが7割、8割くらいになってきたと違いますか。そういう意味では、来る人の考え方が大きく変わってきたように思います。

というのもあるんですけど、自分たちで食べちゃうみたい。だから、伊賀肉を食べたい人はなるべく伊賀へ来てくださいという状況ですね。

各地とのつながり

山田 これからの観光というのは、地産地消ということもありますし、そこできか体験できないこととか、そこでしか食



ますね。高山があれば繁盛して、観光地として大きく注目されているのは、単純化して考えれば、一つは「食」がある。あそこはお酒造りもあれば、自分のところの生産物、それから諸職やお祭りがあるでしょう。それはみんな長い間地域で育まれてきたものなんです。高山はそれを上手にいかしながら一つの観光圏をつくりあげている。ところが、海女の場合みんな下手くそですよ。何にもできていない。例えば、海女が獲ったものはすぐに売られて東京かどこかへ行ってしまふ。地元で消費できないわけですよ。極端に言うと、海女のとったアワビをお客さんに食わすことができないんです。なぜかという、販売や市場のシステムがそうならない。都会で売ろうになつていて、地元で食わせるようになってない。アワビならアワビで、地元で獲れたもの、海女さんが獲ったものをそこで消費できるようなシステムが絶対要るわけですけども、それが育っていない。さらに、しろんご祭とか潮かけ祭とかの海女の祭りは、未だにそれほど知られていないわけですね。地域の文化が地域の中で集約されていない。集約されていないということは、認識されていないということもわかりません。だから、海女文化の中で中心となるものを取り出

べられないものとか、やはりそういうものを求めてみなさん来られるでしょうから、そういうシステムづくりというのが大変重要ですよ。国内にいろいろな海女さんがいるし、忍者もありますけれど、志摩や伊賀はその中心地であるわけですね。その中心地として、こういうことをやっていきたいとか、さらに日本全体とのつながりの中でこうしていきたいということがありますらお願いします。



して、それを素材化することを考えていなくてはいけません。そういうものをストーリーとしてつくりあげていかないと観光には結びつかないだろうと思います。しかし、海女がそんなことをやるわけじゃないですよ。海女さんは生業としての仕事に携わっているわけですから。観光をやられる方が考えてもっとしつかりやってくださいなと。

小林 伊賀の特産物といいますと、伊賀光推進協議会をつくっていただき、そういう中で、伊賀上野観光協会が中心になって、日本忍者協議会というものをつくろうという動きがあります。これには三重県さんにも大変お世話になって、10月には設立の予定になっております(10月9日発足)。国内の観光事業というのはこれからだんだん、良いように言うとか成熟、悪いように言うとか高齢化、過疎化していきますから、新しい需要を取り込もうと思うとやっぱり国外だと思ふんですね。国外の需要を取り込むには、オールジャパンでスクラムを組む必要がありますから、日本忍者協議会を通じて、日本の忍者を世界にアピールして結果的に伊賀へ誘客できたらいいなと思つてます。

石原 海女の方は今までは、民俗学的アプローチが中心だったんですね。歴史とかあるいは自然とかいうものとの結びつきをあまり考えてこなかったんですね。それを三重大の中で海女研究会が立ち上がり、自然科学や歴史、保健体育の先生方も入って、海女を基盤にしたがら学問のジャンルを広げて、海女は自然にも共同体にも関わっている、さらには社会と強い関係意識を持っているということを勉強してきたわけです。これから

牛と伊賀米、あとはあまり知られていないですが、アスパラガスが国内最高級の評価を受けているんですよ。他にも、梨、ブドウがあるんですけども、ほとんど地域内消費で終わってしまったんです。だから、地元でアワビを食べられない聞いてちよつとびっくりしたんです。私たちのところは、地域内消費がほとんどで、伊賀肉はほとんど出て行かないんですね。それだけ生産量が少ない

もつとたくさん先生の先生方に参加していただいて、これを強く打ち出して広げていきたいと思つています。

山田 海女は今世界の海の中で韓国と日本からもつと育てていきたいなと思つてるわけです。今年7月三重大の学生さんと韓国の済州と釜山の学生さんの交流会を、海女というテーマでやらせていただいたんですね。そしたら、学生たちがそれを素材にしながら非常にいい友好関係をつくつたんです。9月には韓国に日本の学生が尋ねていって、韓国の学生さんともう一回交流をやると。そういうふうにして交流関係ができていく。僕はそういうものがベースになりながら、広がっていくのはいいなあと思つてましてね。海つながりで一つずつ広がっていく。そうするとそこに人のつながりが当然できてきますし、若い人たちがそこで交流をしていくというのは、今の少しギクシャクしている日韓関係を豊かなものにしていく一つのきっかけにもなりそうなんです。こういうことも交流のうちかなと思つています。

山田 忍者の方はどうでしょう。これからの戦略的な方向性や、世界的な展開などはいかがでしょう。

小林 やっぱ、三重大伊賀連携

フィールドで活動をしていただいている、国外に発信していただいているというのがとても大きいと思うんですね。私たちは今まで単なるエンターテインメントとかアクションとか、そんなふうな面ではか忍者をアピールしてこなかったのかなという反省があるので、これからはもうちよつと精神的な面とかですね、文化的な面、そういった面で忍者を世界に発信していく必要があるのかなと、山田先生の研究成果を聞かせていただいて、感じているところです。



山田 私は忍者は日本文化をよく表している存在だと思いますし、海女も日本文化をよく表すもので、県の取り組みとして、やはり歴史に根ざしたテーマを選んでいただいたということが非常に功を奏しているかなと思います。これからサミットなどもありますので、県の方ではどういう方向を考えておられるのかお聞かせください。

田中 忍者や海女に限って言えば、本物志向というか、特に忍者ですと、日本忍者協議会を立ち上げて日本として打ち出していくという中で、そうは言いながらもそれぞれの地域での競争はあると思うんです。愛知県さんも一生懸命やり始めてますし、いろいろ競争がある中で、三重県としては三重大さんの協力も得ながら、歴史的な、学術的な研究もした上で、忍者をアピールしていくような進め方をしたいなと。あくまでも本物を指すとして。海女さんについても、今、生業としてやっているわけですので、そういうことを尊重した上で、観光の面でもどこまで打ち出せるかというのをやっていかなければと。これを壊してしまつて作り物にしてしまったら、結果的に10年後は誰も見向きもしないようになってしまますので、生業を大事にした上で、観光として打ち出せる部分を打ち出すという形

ありがたい感謝しています。忍者に関して今後望むことと申しますと、現時点ではまだ研究何年目かで、その局面局面を切り取つたような研究が始まつて、軌道に乗りかけたのかなというイメージを受けてるんですね。やっぱり学術的に完成度を高めようと思うと、体系になる必要があると思いますので、その文化なり、精神なり、戦略なり、そういういろんなものを体系づけて、これが忍学者なんだというところまで持つていただけると、伊賀忍者の地位がぐつと上がるんじゃないかなと思いますので、引き続きよろしくご指導をお願いいたします。また学部長の後藤先生には、まちづくりの方で大変お世話になっております。学部長のようなお忙しい中で、泥臭い仕事も意気を感じてやってくださつてまして、学術的な知見の高い先生方が直接接してくださるというのは地域住民にとって大変刺激になって、誇りにもやる気にもなると思いますので、地域づくりの方も引き続きお願いできればと思っております。

山田 私も持続可能な社会の構築ということで、忍者を単におもしろいというだけじゃなくて、現代人がどのように忍術を使つたらいいのか、そういうものを大卒として、忍者・忍術学の講座をつくり

を進めていきたいなと思います。

三重大学に求めるもの

山田 最後に三重大学に求めるものとして、それぞれご意見があるかと思いますが、できるだけお願いいたします。

石原 地域文化とか地域とかいうものを、これから大学というのの考へていなきやいけないと国も方針づけるけれども、それは本質だと思います。三重県にある大学として三重県を考へていくというのは当然だと思うんですね。そういう中で、海女は研究対象としてまだしつかり捉えられてないように思うんですね。だからそれをどう捉えて研究して糧としていくかということが重要ですね。いっぱいアクアラングや機械があるのに、素潜りで女の人が潜つて、それで苦しい目をしてると考へられてるわけですよ。それを文化として存続させていく根本的なところはどこにあるんだろうというところだろうと思うんですね。そういうのを位置づけていなきやいけない。それを日本語で言うと、持続可能な社会づくりとか、英語で言えばsustainableとか、次の社会を大学として考へていなきやいけない、その核となる中心的なテーマとお考へいただ



ければ、海女を大学としても取組んで考へていこうということになっていくと思ふんですね。さらにそれが自然とつながり、共同体ともつながっているという捉え方が今後海女を中心にして展開されることを望みます。そうすると、自然とそれが人を呼ぶということにつながっていく可能性が大きいんじゃないかなと思ふんですね。

小林 忍者に関しては山田先生をはじめ、三重大学伊賀連携フィールドのおかげで研究が進んでおりまして、大変

あげていきたいなと思つております。今さまさまな先生に研究していただいているので、その成果を学生、市民の方に話す機会ができたらと思つてます。では最後に局長さんからお願いたします。

田中 三重大学さんをお願いしたいのは、やっぱり本物を目指していくという上で、学術的な研究というのが基礎になりますので是非お願いしたいということ、ある程度いろんな研究が進んだら、三重大さんもちろん情報発信力というのは当然あると思うんですけども、県庁をどんどん活用していただけたらありがたいなと。あと人材育成の関係ですね。観光の産業化に向けて、人文学部を中心に、観光地、エリアをトータルコーディネートできるような人材を是非輩出していただければと考えています。部門部門で見ると、全体は見えませんが、広く経営という意味でエリアを見られる人材が出てきてくれると非常にありがたいなと思ひます。

山田 本日はお忙しい中、貴重な御意見をありがとうございます。これからは学部としてさまさまな取り組みをしていきたいと思ひますので、どうぞよろしくお願ひいたします。



伊勢神宮から三重の観光を考える

大川 吉崇 学校法人大川学園理事長

和久産巢日の子豊受大神と天照大神が居ます伊勢国、豊かな海幸御饌の志摩国、山々に囲まれた伊賀国、権現信仰と西国三十三か所熊野の紀国と、律令時代の昔から、三重県は風土と歴史が異なる四つの国から成り立っている。

三重県は、二〇年毎の遷宮で全国から驚くほどの人々が伊勢神宮を訪れる。鈴鹿サーキットのF1、二〇一六年のサミット、全国茶品評会、伊勢志摩国立公園指定七〇周年、そして二〇一七年の全国菓子博と内外から人々の集いが続く。おかげ参りの伊勢と同様、観光の気が三重県に集まったとの時を感じる。

旅の楽しみでは、自然や歴史、文化遺産もさることながら、食事と宿泊に大きなウエートがかかる。鳥羽・志摩地方はホテル型で、食事と言えば“リゾート型フレンチ”や“料亭式郷土料理”といった高級志向である。ここはすでに世界標準に適合しているところが多い。レジャー型施設利用では、ナガシマスパー

ランドとホテル花水木、鈴鹿サーキットとホテル、志摩スペイン村とそのホテルと、これも整っている。だが大部分の人々

は、ビジネスホテルや旅館、ペンションや民宿利用である。宿泊は県内だけでなく、名駅周辺が今ホテル建設ラッシュで、

三重県への観光客を見据えているくらいがある。

最近多い少人数でのツーリズムの旅への対応も大切にしなければならぬ。外国からの人達は日本に来たのだからとの理由で、昔ながらの旅館や民宿でよいという訳ではない。料理の解説を物語を加えて話し、寝具や風呂トイレ等の外国人対応への配慮、そして地域観光へのアドバイスは最低限必要だろう。

さて、三重県のキーワードは古今及び内外を問わず“伊勢神宮”である。そして志摩半島の海女と伊賀流忍者も観光の切り口である。後者は、海の博物館や三重大学、そして県当局や地域の努力で既に世界発信対応がかなり進んできている。だが世界に通じる観光県になるには、課題が無いわけではない。

先般私が七年間住んでいた和歌山県の聖地高野山を訪れると、驚くほど多くの欧米系旅行者が目についた。高野山では殆どが宿坊に泊る。夕食の精進料理だけ



杉坂董(ただす)氏絵

が目的では無い。早朝の勤行に参加し、密教系仏像や仏具を見聞すると共に、宿坊での夜には僧侶と話が出来るためという。彼らの霊場参詣は日本人観光客と違い、一神教信仰心をベースに、理解を超えた異質の多神教信仰の日本の宗教理解に取り組んでいるようだ。そして彼らが持参するガイドブックやフェイスペインク、メールやチャットに宿坊宿泊が推奨されている。“50 things to do in Ise-Shima (伊勢志摩でできる50のこと)”を紹介した英文マップはできた。さて、神宮も含め伊勢志摩はどう仕掛け、どう応えるかである。観光地は宗教背景が多いだけに、日本の宗教を英語で自在に語れる人が必要となる。或いは、タブレット利用によって会話内容が自動翻訳できるシステムが開発されているというから、これに期待することになるのだろうか。

英語はさておき、三重県の場合、少し歴史や民俗や自然に興味があれば、観光コースは豊富に作れる。私の場合、神宮を中心にすると、海外も含め遠来の知人の一日目は外宮・月読宮・倭姫宮・内宮から二か所、そこに、徴古館と神宮美術館が美人画の伊藤小坡美術館を組み合わせる。皇女の奉仕した齋宮と神宮の組み合わせも、平安時代からの日本の流れ



杉坂董(ただす)氏絵

が判り易い。二日目は、朝熊山の金剛証寺庭園と10センチ角の8メートルほどの高さの木の塔婆が三重四重と並び立つ奥の院への参道、そしてリアス式海岸を望みながら鳥羽へ下り、港から日本の漁村風景が今も残る答志島コースである。登山や自然分野に興味がある人なら、せんぐう館、両宮参拝ののち、宮川右岸剣峠への道を途中で車を置いて歩き、神宮

林体感の散策。食関係者は、二見が浦を組み込んでの神田・御菌・御塩殿は時期にもよるが、皆さん目を見張って感激する。聖域ならではの肌で感じてもらえる。そこに祀り事と出あうとか、作長さん

話ができればさらに趣が深まる。

二〇一五年三月新たな観光のヒント

になる仕掛けを経験した。“Traditional food practice and food culture of

Me”と題した講義を依頼されたことによる気づきである。依頼者は北イタリアのスローフード運動で誕生した食科学大学の日本人卒業生で、GENという組織を立ち上げている方である。講義は五十鈴塾を使い、欧米十一か国から一六人が自費で参加していた。太古から食を守護する神を祀る外宮のある地ゆえ三重県を選んだという。県内で一週間滞在して和食の知識・智恵そして技術を学び、世界に和食を発信してもらうという企画であった。この企画は、県内を東へ西へと移動し、観光を兼ねた学習旅行が組まれていた。私の講義はその最初だったため、八百万の神々や神宮一二五社といった多神教から入らねばならなかった。さらに五大・五感・五味そして四季と関連させて、旬のものへとつないだ。三重県の発酵食品についても触れて欲しいとの依頼もあったため、県内の鮎や鱒、鯖や秋刀魚の馴れずしを取り上げた。また、鯖や秋刀魚や鰹の丸のままの糠漬けや塩漬け、さらには塩辛等を映像を用い展開させた。二千年の天照大神、千五百年の豊受大神の御饌を担当する三重の物語であり、今につながる話である。神々から発展する三重県の観光の一つの切り口への道を感じた企画であった。

桑名の観光

吉田 奈稚子

桑名市役所
人文社会科学研究科
二〇〇九年度修了



七里の渡し・伊勢国一の鳥居 建て替え奉祝祭（お木曳行事）

桑名市は、伊勢市に次いで三重県で二番目の観光入込客数を誇る観光都市です。古くは東海道五十三次の宿場町で、東海道において唯一の海路でつながれており、多くの旅人たちが行き交い、物が集まる場所でした。桑名市は、歴史・文化・レジャー・体験のほか、最近では映画・ドラマの撮影現場としても誘致を行っています。ナガシマリゾートは、全国的にも有名であり、一年を通して多くの観光客の方にお越しいただいています。

平成二十五年伊勢神宮の式年遷宮が行われました。二十一年に一度の大事業であり、伊勢に、そして三重県に多くの人が訪れました。県内のどの市町においても様々な取り組みが行われました。広域的に連携して、観光PRなども行いました。桑名市が属する北勢地域では、東海道を中心とした町並みの紹介や、キャラクターたちによる企画、乗り物に特化したパンフレットなど、色々な切り口で紹介を行いました。伊勢神宮の式年遷宮のと

きは、伊勢市だけでなく、合せて周辺地域へ観光する傾向にありました。周辺地域においても、行事・イベントに合せた情報を発信していくことで、地域に観光客を呼び込むこともでき、また観光客も目的を達成でき、双方にとって良い状況が作られることとなります。広域的な活動は非常に効果が高く、イベントとしても楽しいものになりました。

伊勢神宮の式年遷宮から二年後の平成二十七年五月三十一日、桑名市街地は、白い法被の人と、多くの観光客で賑わいました。お木曳行事に参加したその人数は、約二万人でした。老若男女が思いと力を合せて奉曳車を曳きました。無事にお木曳が終了した時には、小さなお子さんも達成感をいっぱいにした笑顔が浮かべ、大人たちもみな無事に終えた感動を分かち合っていました。七里の渡しに建つ鳥居の建て替え行事、その木材を運ぶ行事がお木曳行事です。今回のお木曳は、伊勢神宮の式年遷宮の時に実際に使

われている奉曳車をお借りして行い、かつて無いほど大規模な行事でした。

お木曳行事だけではなく、それに合せてウォーキングのイベントなども開催しました。大きな行事や注目度の高い催しが行われると、多くの観光客で賑わい、その日は多くの人が集中することになります。しかし、催しがなくとも多くの観光客に訪れてもらえるくらい魅力的な特産品や素材が桑名市にはいっぱいあります。桑名市のことをよく知らない方も、まだまだ多くいらっしゃいます。多くの人が桑名を訪れたこの日は、桑名を知ってもらいたい体感してもらおう最大のチャンスです。桑名のいろいろな情報を発信し、盛り上げ、また各事業所も総力を挙げておもてなしをし、おいしい食べ物などで桑名市を感じてもらえるようお迎えした日でもありました。

このお木曳行事を通じて新しいご縁が結ばれ、伊勢の人たちとの交流や結びつきが深まりました。そして、二十年後も、四十年後も、次の時代へとつながっていくように、桑名の人々もこの行事を大切に受け継ぎたいという思いが大きくなっています。地元のお祭りや行事を守り発展させたいという人々の思いと、そこへ訪れる人々をもてなし、その土地の魅力を感じてもらいたいという気持ちが観光客をひき

つける魅力ではないかと思えます。

「日本一やかましい祭」と称される桑名の石取祭は桑名の夏の風物詩であり、このお祭りで夏の最高潮を迎えます。桑名つ子にとっては一年の最大の楽しみというくらい大切な行事です。石取祭は国の重要無形民俗文化財に指定されており、また全国の同じような山車を曳くお祭りとともに、来年のユネスコ無形文化遺産の登録へ向けて盛り上がっています。石取祭を見に桑名へ訪れる観光客も年々増加しています。石取祭は、それぞれの町ごとで「祭車」と呼ばれる山車を

もっており、祭車は全部で約四十台あります。それらがいつせいに太鼓と鉦を打ち鳴らし始める瞬間は、とても荘厳な雰囲気です。世界遺産に登録されれば、ますます多くの人に関心をもってもらいたいというようになります。

伊勢神宮の式年遷宮を中核とした観光キャンペーンの最終年度の今年、伊勢志摩サミットという一大イベントの開催の決定がありました。世界各国から多くの人が訪れ、また注目を集めることとなります。伊勢神宮の式年遷宮の時以上に、世界中へと広がりを見せることになりま

す。サミットの開催地として世界へ情報が発信されることは、より一層三重県を知ってもらおう最大の機会です。そして、桑名市ではジュニアサミットの開催が決まっています。世界各国の方々に、日本の文化・伝統を知ってもらおう中で、より桑名らしき溢れるかたちで、日本の良さを感じてもらえればと思います。今までは観光客への情報発信も日本人向けのものがほとんどでしたが、これからは海外へも目を向けて、より多くの方に桑名に訪れてもらい、楽しんでもらえればと思います。

桑名の石取祭



観光の今と昔

黒田 洋輔

(株)観光販売システムズ
人文学部
二〇〇四年度卒業



志摩自然学校【三重・シーカヤック・3時間】経験者・大人向け！英虞湾

現在の「観光」について、以前と比較してどのようなことが起こっているのだろうか。このことを述べるために、まず、以前の観光とはどのようなものであったかを思い出してみる。以前の観光は団体バスツアーが主流であった。今ではほとんど見られなくなった会社の慰安旅行や町内会の旅行会社に頼ったツアーが主流であった。しかし昨今、インターネットでの宿泊予約等、より個人型にシフトしている。自分で飛行機や電車等も合わせて簡単に予約が可能になり、わざわざ旅行会社のカウンターへ行かなくてもよい環境となっている。

その要因として、情報の拡散があげられる。今や世界の情報も簡単に手に入れることができるため、いかに観光客を獲得するか戦略が必要になる。確かに、TV等で取り上げられた観光地や話題性のあるものについては、観光客来訪に絶大な効果が発揮される。しかし、これは一過性のものになるのではないだろ

うか。情報が流れた直近は色々な地域から観光客が訪れるが、それがいつたいつまで続くかが重要になってくる。観光客の来訪に繋げるための手法はいくつかある。TVや雑誌等のメディアを活用したのもや、旅行会社を活用したもの、インターネットを活用したものなど多くある。どの手法が正しいかはわからないが、どれも間違いではないはずである。今後必要になってくるのは、誰でもいいから来てほしいとの考えではなく、いかにターゲットを絞った誘客展開ができるかであると思う。そのためには、現在来訪している客層や目的、交通手段、どこか地域から来訪しているかなど、様々なデータを分析することが必要である。そのデータをもとにターゲットを絞っていくことで、誘客戦略が立てられるはずである。旅行の客層には、「一人」「友人」「女子」「ファミリー」「アクティブシニア」等があることから、ピンポイントの旅行の動機付けを与えることで来訪に繋がっ

ていくのではないだろうか。

最近では観光施設や神社仏閣、景観等を楽しむのが目的ではなく、「スイーツめぐり」や「雑貨屋めぐり」を楽しむに旅行へ行く女性が増えている。旅行の決定には恐らく女性が主導権を握っており、各メディア等がこの層に向けて観光PRを仕掛ける流れがきている。特に20、30代の独身女性については日々の仕事で疲れた体を癒すために温泉旅行へ出かけたり、自分へのご褒美としておいしい食事をしたりと、稼いだお金をそのまま自分自身へ使うことができるという。

旅行形態については、以前の観光事業者等が運営しているところではなく、今まで全く観光に携わっていない一次産業事業者等が実施している体験プランや民泊等も人気となっている。農業体験や漁業体験等は教育旅行、研修等でよく利用するが、一般的に観光客が旅行行程の中に組込むことはほとんど見られなかった。例えば、〇〇市が「産業」を観光目線に置き換えた誘客展開を実施したとする。一般的に教育旅行の社会見学等では工場見学を実施しているが、これを観光客が申込み旅行会社ツアーの中へ組み込んで発信することで、旅行会社が掲載するパンフレットやHP等で「〇〇市」という文字が発信され、単にお客様が〇〇市に



メナード青山リゾート
【三重県伊賀・陶芸・手びねり】親切な指導のもとで、陶芸の楽しさを満喫！



忍者衣装を着て伊賀を楽しむ外国人観光客

来るだけでなく、それを目にした方にも情報が届くことになる。今回はツアー参加まで至らなかったとしても、産業体験は観光PRも兼ねながら実際の誘客戦略の一つに成り得るといえるだろう。

視点を国内旅行者からインバウンド（海外からの旅行者）に向けてみる。ここ最近、大都市圏ではよくインバウンドが見られる。旅行形態としては、アジアからは団体ツアーが多く、欧米ではFIT（個人での来訪）が増えている。この

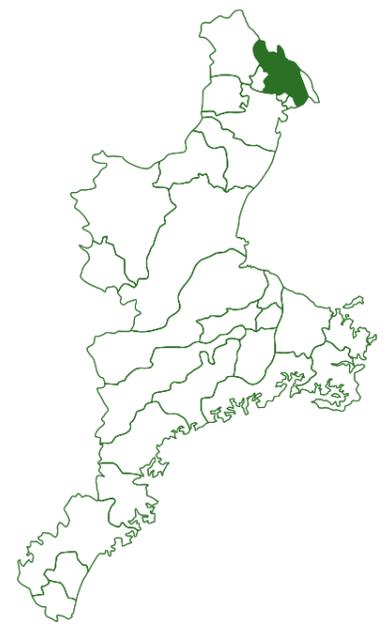
ため、大都市圏のビジネスホテル等では宿泊予約がとれず、近郊にまでその余波が来ている。伊勢志摩サミットも控えており、今後インバウンドが国内に増えてくるのが予想され、この対応がどの自治体でも課題となっている。Wi-Fi設置や立て看板等、受入整備が進められている中、将来を見据えて、国内の旅行者をターゲットとした考えから、インバウンドの方の需要も含めて「観光」が変化していくのではないだろうか。

以前と比べ、観光客の旅行目的も変化してきているため、現状の分析をしつつ、観光の動向を探っていくことで、どこか自治体も発展していくはずである。また、観光客にとっても全国にこの取組が進んでいくことで、訪れたいと思う観光地が増えてくると思う。今後は着地側よりも発地側（お客様が住んでいる地）に情報を届ける取組が必要になると言えよう。

Culture and Society in Mie

桑名市

三重県の研究



三重大学大学院人文社会科学研究所の講義科目「三重の文化と社会Ⅰ・Ⅱ」は、夜間開講、社会人受け入れ、地域交流誌『TRIO』の刊行等をはじめとした大学院改革に伴い、二〇〇一（平成13）年度から開講され、本年度は15年目となる。

三重大学では、地域社会と密接に連携していくことを重要な課題としている。本講義はこの課題と関連して、地域から課題を自ら発見すること、それに対して自分なりの独自の調査に基づき実態を把握すること、さらにそれを通して地域社会の人々と交流を深めることを目指している。開講以来、三重県内の市町村から1つを対象地域に選定し、現地でのフィールドワークを行うことを基本としながらも、8年前から

フィールドワークに依らない三重県全体を対象とした文献指向型の研究も選択できることとした。これは、フィールドワークに依らない研究分野の大学院生に対して履修機会を提供するためであり、より多くの院生に本講義を受講し、地域社会の課題に目を向けて欲しいと考えたからである。

今年度は、対象地域を桑名市とし、第1回講義では、各自の専門領域に照らした研究構想を報告してもらい、第2回講義では、桑名市においてジェネラルサーベイを実施した。受講生のテーマに沿って、桑名市役所で市の担当者や図書館、博物館の職員の方からお話を伺い、昼食後、2つのグループに分かれて現地視察を行った。Aグループは海蔵寺、多度大社、縣神社などを、

Bグループは顕本寺、円妙寺、照源寺などを、市職員の方のガイドのもと視察した。総じて、受講生の研究の手掛かりとなる有意義な機会となった。第3回講義では、ジェネラルサーベイを受けて、改めて研究テーマの詳細と夏季休業中の調査・研究計画についての研究報告がなされた。第4回講義は、夏季休業中の調査・研究成果の中間報告を行った。例年、休業明けの中間報告は現地での合宿形式で開催してきたが、今年度は指導教員・院生の予定を合わせる

ことが難しく、学内での通常の講義形式での開催とした。第5回講義では、これまでの研究成果についての最終報告が行われ、そこでの指摘事項をふまえて、報告書用の原稿およびTRIO原稿を作成すること

2015年度担当教員

山田 雄司
人文学部教授
(地域文化論専攻)

豊福 裕二
人文学部教授
(社会科学専攻)

となった。第6回講義は現地報告会の予行演習をかねて、学内発表会という形式で行われた。
本講義は地元の方々のご協力なくして成り立たないものであり、今年度も講義を進めるにあたって多くの方々にお世話になった。とりわけ桑名市市長公室の松岡孝幸様

には、ジェネラルサーベイや現地報告会の実施に際してひとかたならぬご助力を賜った。また、すべてのお名前をあげることはできないが、受講生がヒアリングさせていただいた行政機関、諸団体および企業・個人の方々には大変お世話になった。あらためて厚く御礼を申し上げます。

地域研究フォーラム in 桑名



三重大学大学院人文社会科学研究所 「三重の文化と社会」研究成果報告会について

2016年1月23日(土)13時より、桑名市伊藤徳宇市長のご臨席を賜り、桑名市中央公民館にて「地域研究フォーラム in 桑名:三重大学大学院人文社会科学研究所「三重の文化と社会」研究成果報告会」を開催した。本年度は、産業経済論ゼミナール所属の学部学生による「桑名市中心市街地における街なか観光の展望」という報告の後、大学院生による研究発表を行った。当日は報告者を含め50名ほどの参加者があり、研究報告の後には内容についての詳細な質問もあり、有意義な質疑応答となった。なお当日は、『2015年度「三重の文化と社会」研究報告書 桑名市の研究』が参加者に配付された。

桑名市におけるエネルギー政策の成果と課題

伊藤 嘉浩

人文社会科学研究所
社会科学専攻
産業経済論

はじめに

2011年3月に生じた東京電力福島第一原子力発電所の原子力事故以来、日本におけるエネルギー供給体系の見直しが行われてきた。特に注目を集めているのが再生可能エネルギーの利用である。再生可能エネルギーの利用にはその地域における資源を如何に有効利用するかが鍵となる。そのため、地域単位での普及が促される必要があり、地域やエネルギー利用を管理する主体が育っていない日本では、地域における再生可能エネルギー普及の重要な役割を担うのは地方自治体が最適である。

桑名市では、2013年に「桑名市スマート・エネルギー構想」を策定し、エネルギー政策のあり方を示している。本稿では、同構想において記されている事業実施計画の成果と経過を検証し、地方自治体が行うエネルギー政策の課題、

可能性について考察したい。

I. 桑名市スマート・エネルギー構想

2013年3月に策定された本構想では、①再生可能エネルギーの導入により、エネルギーの地産地消を推進する、②省エネルギー活動のさらなる推進、③市民全体で環境について考える、という基本的な考え方のもと、「創る」「省く」「賢く使う」「学ぶ」という4つの柱とそれぞれの目標が定められている(図1)。また同時に、構想期間10年間でそれぞれの数値目標とこれらの施策を補助するための事業実施計画が定められ、13の事業が盛り込まれた。ここではそのうち、代表的な事業について検証したい。

太陽光発電支援事業

本事業では、①再生可能エネルギー利用を促進すること、②地域経済を活性化

性的問題の3点をあげていた。しかし、前二者については、同様の事業が他地域で問題なく行われており、絶対的な障害とは言い難い。一方、最後の採算性の問題については、国の施策である固定価格買取制度の売電単価の減額が大きく関係しており(図2)、自治体の努力だけでは限界があるといえる。

次に、家庭用新エネルギー等普及支援事業とは、エネファームなどの普及促進のため、設置費の一部に対して補助金を交付するというものである。補助件数は300件で、計600万円の予算額の中でおこなわれている。課題としては、各世帯が給付する金額は1世帯当たり2万円であり、普及を促すに足りる十分な予算が設けられていないことである。市ではエネルギー政策よりも市民の福利厚生に使用する予算が重視される傾向にあるが、この傾向は桑名市に限られたものではなく、日本の行政に共通した課題といえよう。

先進的都市型スマート住宅供給事業

本事業は市内の「陽だまりの丘」地区においてモデル住宅団地を形成しようとするもので、2014年に大和ハウスがその事業者を選ばれ、基本協定を市と

すること、③地域全体の省エネルギー化や環境に対する意識を向上させること、④災害時の公共施設機能を強化することを目的としている。具体的には、市有施設

設屋根貸事業と家庭用新エネルギー普及等支援事業の2つが行われている。まず、市有施設屋根貸事業とは、市が保有する公共施設の屋根を太陽光発電の



図1 桑名市スマートエネルギー構想の4つの柱と数値目標
出典：桑名市(2013)、66ページ。

縮結した。住民が共同で太陽光発電システムを所有し、売電収入によって団地内のエネルギー自給を達成しようとする取り組みである。課題としては、発電システムの新設費用を大和ハウスからの持ち出しに依存していることと市との関係が、地代収入とエネルギー利用の情報提供にとどまっていることである。

マイクロ水力発電の実用化

本事業は、市内の公園の水路や農水路を利用したマイクロ水力発電装置のNTN(世界有数のベアリングメーカー)との実証実験である。農水路等の利用に許認可が必要であることから、NTNが市に協力を求めたのが事業の始まりであった。ただし、実証実験が終了した現在、NTNがどのような成果を生み出したのかについては把握できていないのが実状である。

II. 地方自治体のエネルギー政策の課題

以上を踏まえて、桑名市および地方自治体のエネルギー政策の課題を整理すると以下の3点となる。第1は、固定価格買取制度にみられるように電力供給体系が国の方針によって規定されるという国のエネルギー政策の在り方である。第

2は、自治体組織の問題である。エネルギー政策を行うための予算を優先的に確保することが難しく、大きな財源を独自でまかなうことができない。第3は、市としての姿勢の問題である。構想策定時の熱意に比べると、現状での取り組みへの積極性は否めない。市単体でのエネルギー政策が難しい現状、政策推進には民間事業者の資金力やノウハウに加えて、NPOや市民団体の自主的な活動が必要であり、そこに市としての積極的な介入が求められる。

(指導教員/豊福裕二)

参考文献

- ・桑名市(2013) 『桑名市スマート・エネルギー構想』
- ・松岡孝幸(2013) 『循環型社会を創る!』
- ・「全員参加型」でエネルギーの地産地消を目指す 『地方自治職員研修』
- ・2013年9月号 公職研
- ・経済産業省 資源エネルギー庁HP 「固定価格買取制度 情報公表用ウェブページ」 http://www.fri.go.jp/statistics/public_sph.html
- (2015年12月15日閲覧)

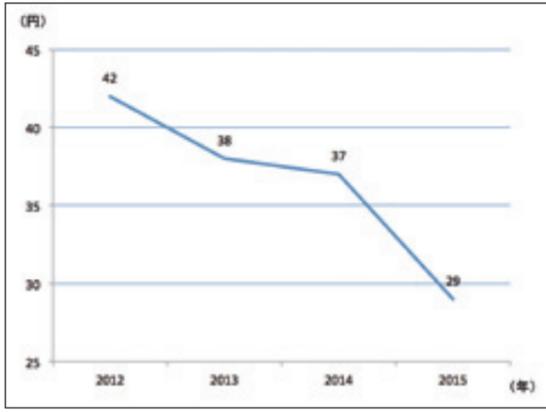


図2 固定価格買取制度による売電単価(太陽光発電)の推移
注:太陽光発電(10kW未満)の調達価格(円/1kW当たり)
出典/資源エネルギー庁HPより筆者作成

ために民間業者に貸し出すというものである。2015年度における実績としては、2棟の屋根の上に太陽光パネルを設置し、民間企業が発電した電力を全量、中部電力へ売電している。構想段階では、4棟の公共施設で「屋根貸し」が計画されていたが、現在は2箇所ですら現に留まっている。その原因として市では、災害時の避難地の減少につながるという問題、建築物の構造的な問題、採算

桑名市の自治体行政におけるPFI方式の活用の在り方 岡村 三四郎

— 桑名市立中央図書館を事例として —

人文社会科学研究所
社会科学専攻
地方自治論

はじめに

PFI (Private Finance Initiative) とは、公共サービスの提供に際して民間資金を活用し、民間事業者に施設建設とサービスの提供を委ねる手法である。これまで行政が担っていた業務を民間の視点で行うことになるため、メリットだけでなく様々なデメリットも指摘されている。では、自治体行政にPFI方式を導入することは、本当に望ましいことなのだろうか。

I. 桑名市立中央図書館におけるPFIの概要

桑名市では、旧図書館、保健センター、勤労青少年ホームの老朽化が進み、再整備が急務となっていた。そこで、これらをまとめた「図書館等複合公共施設」を整備するにあたり、PFIの導入可能性について調査が実施された。その結果、

効率的な運営が期待できると評価されたため、PFIを導入することが決定した。

その後、事業者決定、施設建設などを経て、2004年10月に「くわなメディアライヴ」がオープンした。

事業方式は、事業者が資金調達、施設建設 (Build)、30年間の管理・運営 (Operate) を行い、当該期間終了後、市へ所有権を譲渡 (Transfer) するBOT方式を採用している。また、事業者が提供するサービスに対して、市から支払われるサービス対価で事業費をまかなう形態となっている。この事業を担うのが、複数の構成会社からなる桑名メディアライヴ株式会社である。その中の図書館流通センター (TRC) が図書館業務を担当する。

II. PFI導入のメリット・デメリット

メリット

第一に、複合施設になったことで、一つの施設に多機能が集約している。図書館だけでなく、託児室やタリーズコーヒーなどを利用することができる。

第二に、図書館は「いつでも、どこでも、誰でも利用できる図書館」という基本理念を掲げており、旧図書館と比較してサービスを拡充している。例えば、午前9時から午後5時までとなっていた開館時間を、一律に午前9時から午後9時までとした。また、市内の他の図書館 (ふるさと多度文学館、長島輪中図書館) とシステムを統合しており、3館で図書を共有することや、広範囲での図書の検索が可能となっている。

第三に、市の財政負担が軽減される。

【図表1】財政負担比較表

	現在価格
市が直接実施する場合	97億7,400万円
PFI方式で実施する場合	76億2,200万円
市の財政負担軽減額	21億5,200万円
市の財政負担軽減率	約22.0%

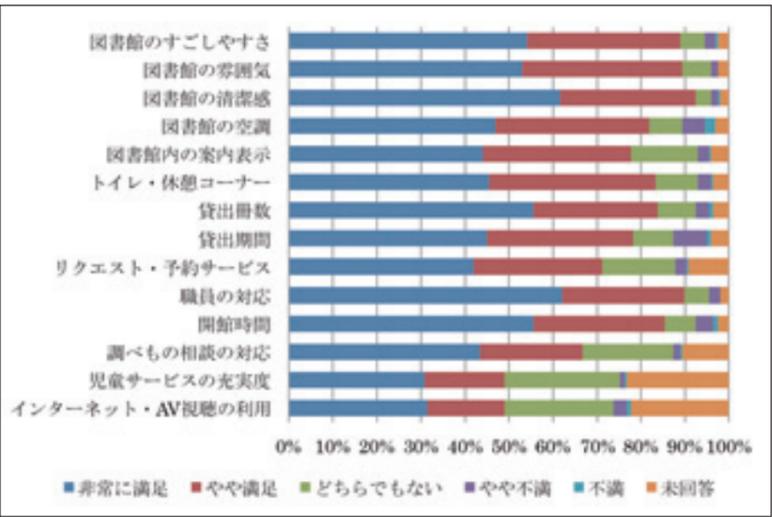
日本経済研究所の試算によると、図書館業務を市が直接実施する場合と比較して、PFI方式で実施する場合には21億5,200万円の財政負担が軽減される (図表1)。

第四に、利用者の満足度が高くなっている。2014年5月に実施された利用者アンケート結果をみると、「児童サービスの充実度」「インターネット・AV視聴の利用」の項目では、「非常に満足」と「やや満足」の回答の合計が半数程度にとどまっているものの、その他の項目では概ね大きな割合を占めている。このことから、多くの利用者が図書館に対して居心地のよさを感じていると

いえる (図表2)。

第五に、市とTRCの協働によるイベントが行われており、広く市民に親しまれている。代表的なものとして、①図書館を使った調べる学習コンクール、②昭和の記憶の二つがある。①は、自分のもつ疑問について図書館資料などを使って調べ、その結果をまとめたレポートを

【図表2】利用者アンケート結果



応募作品として募集するイベントである。②は、桑名の郷土資料を収集し、市民に公開・展示するとともに、資料に関する市民の記憶を聞き取り調査するイベントである。筆者は、2015年10月に開催された「第10回 昭和の記憶」に参加した。イベントを通じて多くの市民の方々と交流することができ、また桑名の昭和史に触れることができ、とても有意義な経験となった。

懸念されるデメリット

懸念されるデメリットとして、①公共性の側面、②インセンティブの側面の二つが考えられる。①は、「行政ではなく民間事業者が図書館業務を担うとなると、利用者からの要望が高い図書ばかり集めて、これまでの図書館が有していた文化的・学術的な価値が失われてしまうのではないか」という懸念である。②は、「効率的な運営や利用者を増加させる努力など、TRCの民間視点のインセンティブは働くのか」という懸念である。

デメリットへの対応

前述のデメリットに対する図

図書館の対応をみていく。①では、大学の教授などで構成される図書等選書選定委員会が組織されており、市の方針に基づいて図書や資料の購入の可否を決定している。この委員会が機能し、図書や資料のバランスの保持を図っている。また②では、市がTRCの業務についてモニタリングを実施しており、求められる業務水準を達成しているかどうかを継続的に確認している。さらに、TRCへのサービス対価は利用者数に応じて増減する仕組みであり、利用者が増加すれば多くのサービス対価が支払われる形となっている。

III. 自治体行政においてPFI方式を活用することの意義

これまで検討してきた結果、自治体行政においてPFI方式を活用することには三つの意義があると考えられる。

第一に、「提供するサービスの向上」である。数年単位で仕事が変わる自治体職員と比較して、経験やノウハウの蓄積がある民間事業者にPFIという形で自治体行政を任せること、サービスの向上が期待できる。

第二に、「行政の財政負担の軽減」である。図表1でも示したように、PFI

方式で実施する場合には市の財政負担が大きく軽減される。第三に、「行政と民間事業者の協働による相乗効果」である。行政と事業者が対立するのではなく、緊張 (モニタリング) と協働 (イベント) の関係を保ちながら切磋琢磨すること、よりよいサービスにつながる。この点は、従来の行政単独の運営では得られない効果である。

おわりに

自治体行政においてPFI方式を活用する場合には、メリットだけでなく様々なデメリットも考慮する必要がある。懸念されるデメリットについて検討し、対策を講じることで始めて、効果的・効率的な自治体行政の手法としてPFI方式を位置づけることができる。

(指導教員/岩崎 恭彦)

参考文献

- ・黒田勝(2005) 「図書館等複合公共施設へのPFI導入」 『地域政策』三重から
- ・No.14 三重県政策開発研修センター
- ・飛石真理子(2014) 「日本初のPFI事業による図書館の軌跡―桑名市立中央図書館の活動―」 『中部図書館情報学会誌』
- ・Vo.154 中部図書館情報学会

ことばの音声の獲得と地理的要因の影響

黒上 久生

人文社会科学研究所
地域文化論専攻
言語学

はじめに

日本語には様々な方言があるが、その分布に関しては研究が進んでおり、かなり詳細な分布地図が作成されている。例えば今回調査を実施した桑名市においては、市内を流れる木曾三川が日本語の方言のいくつかの特徴について東西の境目となっていることが先行研究（柴谷1990など）によって明らかにされている（表1参照）。

本研究では、そうした方言の特徴の中でもアクセントに注目、大人におけるアクセント分布に関する地理的要因の影響が幼児においても観察されるか否かを通して、方言の特徴に関する「桑名らしさ」の現状を調査・報告する。

I. アクセントと その規則性

日本語においては、「橋」と「箸」の

る。例えば京阪アクセントにおいて1類に分類される語が関東では3類に分類されるといったことは無い。つまり、関東と京阪アクセントにおいてその配置が異なる語を発話させ、それがいずれの体系の物であったかを判別することで幼児がどのアクセントの話者であるかを知ることが出来る。

ように、同じ音の連鎖で構成される語がいくつも存在する。しかしながら、こうした語に関して、私たちはそれらをしつかりと区別することが出来る。これは、そうした語に関して、それぞれの音の相対的な高さ（アクセント）を聞き分けているからである。例えば、関東アクセントにおいては、「ハシ」の最初の音を高く発音した場合は「箸」を、後の音を高く発音した場合は「橋」を意味する。こうした音の対立が意味の対立を区別する上で大きな役割を果たしている。

また、こうした日本語のアクセントは全く無秩序に配置されているわけではなく、そこには一定の規則性が存在する。日本語の語彙は、どういったアクセント配置を受けるかによっていくつかの語類に分類されるが、表2が示す通り、そうした分類は日本語の主要なアクセント系である京阪アクセント、関東アクセント、二型アクセントの全てに共通してい

る。例えば京阪アクセントにおいて1類に分類される語が関東では3類に分類されるといったことは無い。つまり、関東と京阪アクセントにおいてその配置が異なる語を発話させ、それがいずれの体系の物であったかを判別することで幼児がどのアクセントの話者であるかを知ることが出来る。

II. 実験調査

調査方法

調査は揖斐川を挟んで東西に位置する桑名市内の幼稚園二か所で実施、両幼稚園に通う5・08から6・07の園児57名が対象となった。調査は実験者と被験者の一対一形式で、パソコン上に映し出されたアニメキャラクターの接写が体のどの部分かを答えるクイズ形式のおあそびを通して園児の発話を促した。これらの回答は録音され、実験者がそれを聞き直し、関東と京阪のいずれのアクセントで発音されていたかを集計した。トークンワードは表3の通りである。

集計に際して、「おめめ」や「おてて」などトークンワード以外で回答した園児や、トークンワードに「の部分」と続けて回答した園児、録音からのアクセント判別が不可能であった園児に関しては除外、最終的な集計結果に含まれた園児は45名である。

調査の結果から、揖斐川周辺地域に住む園児に関して、彼らが一樣に関東アクセントを獲得していることが分かった。方言アクセントの変化に関しては、平山1978や阿部2006をはじめとする多くの先行研究によって、テレビや他地域からの人口の流入による影響が報告されている。今回の調査結果に関して、そうした要因が園児の関東アクセント獲得の背景にあったと思われる。一方で、サンプルとなるデータ数が少

表1: 木曾三川が境界となる日本語の音声的特徴

方言	アクセント	音形	話意
関東	橋ハシ	カッチキタ	ご飯を炊く・大根を煮る
京阪	橋ハシ	コーテキタ	ご飯/大根を炊く

表2: 類別語彙に基づく方言アクセントの特徴

類別	所属単語	京阪	関東	2型
1類	鼻・姉・牛・柿	ハナ	ハナ	ハナ
2類	橋・石・歌・川	ハナ	ハナ	
3類	花・家・色・耳	ハナ	ハナ	ハシ
4類	箸・息・米・海	ハシ	アメ	
5類	雨・朝・赤・環	アメ	アメ	

表3: トークンワード4種

語	関東アクセント	京阪アクセント
目	メ	メエ
手	テ	テエ
耳	ミミ	ミミ
尻尾	シッポ	シッポ

ないことから、今回調査した揖斐川の西側地域において完全な関東アクセント化が生じているとは断定し難い。ことばの利用に関しては、当事者間の関係性が大きく影響するため、本来は京阪アクセントを用いる幼児が部外者である実験者に対しては「余所行き言葉」である関東アクセントを用いたという可能性も十分に考えられる。当該地域におけることばの特徴の現状をより詳細に知るためには、今後もこうした調査を継続していくことが重要となる。

(指導教員/杉崎 勉司)

謝辞

実験にご協力くださった保育園の園児と保護者の皆様、先生方に心より感謝いたします。

参考文献

- 秋永 一枝 (2009) 『日本語音韻史: アクセント史論』 85-102, 笠間書院
- 阿部新 (2006) 『小笠原諸島における日本語の方言接触: 方言形成と方言意識』 南方新社
- 上野秀治 (監) (2007) 『桑名ふるさと検定桑名のいろは』 204-207 桑名商工会議所
- 金田一春彦 (監) 秋永 一枝 (編) (2001) 『新明解日本語アクセント辞典』三省堂
- 杉藤美代子 (監) 佐藤亮一 (編) (1997) 『日本語音1 諸方言のアクセントとイントネーション』三省堂

表4: 揖斐川の東側での調査結果

語	関東アクセントで発音した幼児の数	京阪アクセントで発音した幼児の数
目	22(100.0%)	0(0.0%)
手	22(100.0%)	0(0.0%)
耳	21(95.5%)	1(4.5%)
尻尾	20(90.9%)	2(9.1%)

表5: 揖斐川の西側での調査結果

語	関東アクセントで発音した幼児の数	京阪アクセントで発音した幼児の数
目	22(95.7%)	1(4.3%)
手	23(100.0%)	0(0.0%)
耳	21(91.3%)	2(8.7%)
尻尾	22(95.7%)	1(4.3%)

神身離脱における「神道」について

『多度神宮寺伽藍縁起并資財帳』などを手がかりに――

和田元樹

人文社会科学研究所
地域文化論専攻
思想史

はじめに

『多度神宮寺伽藍縁起并資財帳』（七八八年成立）は、日本仏教史における神仏習合思想の初期形態を伝える有名な資料である。そこにみられるのは、罪業によって神の身を受けた苦しみを神自身が訴え、仏法への帰依によって神の身を離れたいと望む「神身離脱」という事態である。多度神宮寺の建立については、七六三年、多度神社東方の道場で修行していた私度僧満願に多度神の託宣が降ったことがその端緒となっている。そのとき多度神は、「我れは多度の神なり、吾れ久劫を経て重き罪業を作し、神道の報を受く、今冀はくは永く神の身を離れんがため、三宝に帰依せんと欲す」と語ったという。ところで、ここで多度神の言う「神道の報」とは、何を意味するのだろうか。「神道」という語は、一般に日本在来の神祇信仰（かんながらの道）を



多度神宮寺跡伝承地

I. 他資料にみえる神身離脱

ここでの「神道」の意味を明らかにするために、同時代の資料にみえる神身離脱伝承、さらに中国仏教における神身離脱を参照してみよう。まず、『家伝』（七六〇―七六二年成立）「武智麻呂伝」には、氣比神の神身離脱と共に「人と神と道別にして、隠りたると顕はれたると同じくあらず」という武智麻呂の言葉があり、「道」は人と神とで異なる「世界」を意味する言葉として使われている。また、『類聚国史』（八九二年成立）では、若狭国比古神が「我れ神身を棄け、苦惱

甚だ深し。仏法に帰依し、以て神道を免れんと思ふ」と語っており、神の身は苦惱の深いものであることを訴えている。ここで、「神道」は仏法への帰依によって免れるべき世界として想定されていることが注目される。さらに、『日本三代実録』（九〇一年成立）においては、「神霊と云ふと雖も未だ蓋纏（せがひ）世俗のきずな）を脱せず」という近江国野洲郡奥の嶋の神の言葉があり、神もまた現世の苦しみから逃れられない衆生の一つであることが語られている。加えて、『日本霊異記』（八一〇―八二三）には、前世では外国

であったという神廟の神は、神の身から離れることを望むが、その際「瞋恚（怒り）を以ての故に、此の神報に墮す」と告白している。ここでは、過去の罪業（瞋恚）の報いがかつての修行僧を神へと墮在させたことが語られている。また、道宣（五九六―六六七）の『統高僧伝』には、同じく神身離脱を望む神の言葉の中に、「神道の罪障多く苦惱有り」とあり、「神道」の罪障は苦惱の深いものであるとされている。注目すべきは、これら「神報」や「神道」の語が中国仏教の伝記中

に使用されており、従って日本の神祇信仰を指す「神道」とは無関係であると考えられる点である。ここでの「神道」とは、神が罪業によって生まれ変わった結果として「墮ちる」世界を指す言葉なのである。

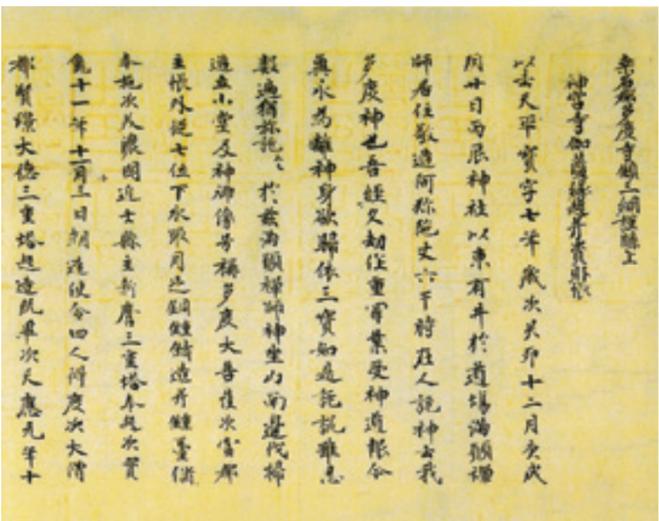
おわりに

衆生が自ら作った業によって生死を繰り返し、輪廻し続ける世界は、仏教では「六道」と呼ばれている。「六道」とは、悟りを得られない衆生が迷う世界で

これらの資料から、神の身を受けることは、過去の罪業（悪因）によって生まれ変わった結果として、現世で受ける報いであると考えられ、「神道」とはそのような報いを受ける苦惱の深い世界を意味すると思われるのである。

II. 中国仏教における神身離脱

このような神身離脱は、日本固有のものではなく、その源流は中国仏教に求められる。恵皎（四九七―五五四年）の『高僧伝』の記すところでは、前世で修行僧



『多度神宮寺伽藍縁起并資財帳』冒頭

たものなのである。そして、これらを踏まえれば、『多度神宮寺并資財帳』における神の言葉は、「重き罪業」をなした悪因によって生まれ変わり、その苦果として神の世界である「神道」に墮ちる「報」を受けた、という意味に解釈できる。「神道」に墮した現在の「神の身」を離れたいがために、神は「三宝」（仏教）への帰依を望んだのである。
(指導教員／遠山敦)

(※『多度神宮寺伽藍縁起并資財帳』の写真は、多度大社及び桑名市教育委員会より掲載の許可をいただき、多度町教育委員会編『多度町史』資料編一、多度町、二〇〇二年より引用しました。)

桑名郡における古代東海道の一考察

丸山 優香

人文社会科学研究所
地域文化論専攻
考古学

はじめに

律令制下の七道（東海道、東山道、北陸道、山陰道、山陽道、南海道と大宰府を中心とした西海道）は、国が定めた行政区画であり、京と各地の国府を繋ぐ官

道でもあった。8世紀に入り、政府が中央集権国家を作り上げるようになる

には規定数の馬（はま）が備えられ、政府から支給される駅鈴を持つ者だけが馬の使用を許されていた。

『延喜式』諸国駅伝馬条には、伊勢国の駅家として7駅（鈴鹿駅、河曲駅、朝明駅、榎撫駅、市村駅、飯高駅、度会

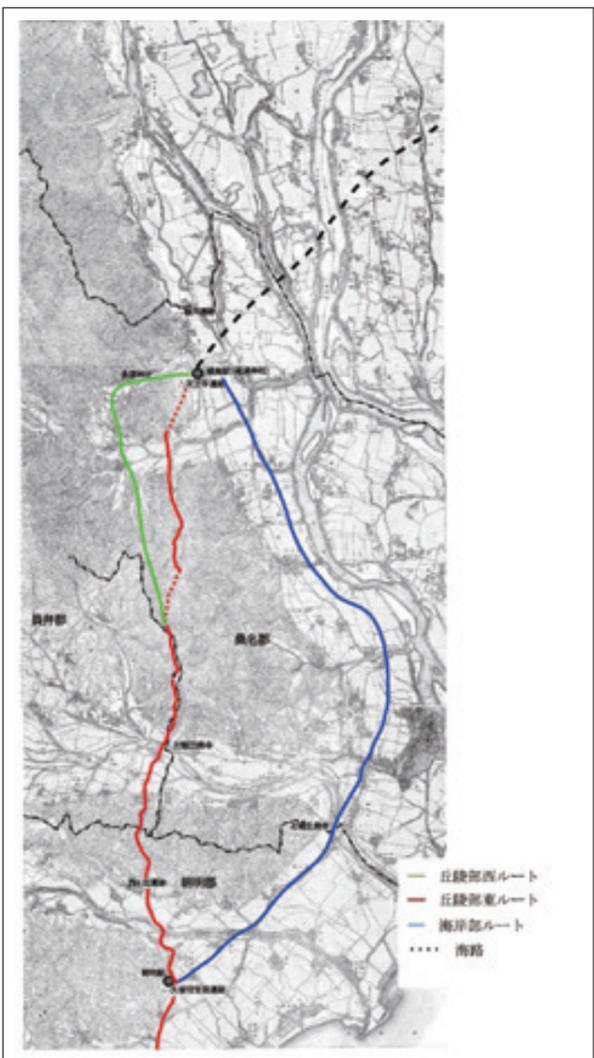


図1 朝明駅—榎撫駅間の東海道想定ルート

駅）が記されており、そのうち東海道本路沿いにあるのは、鈴鹿駅から榎撫駅までの4駅である。これらの駅家の比定については、藤岡謙二郎氏（藤岡 1978）、新田剛氏（古代交通研究会編 2004）、武部健一氏（武部 2004）、木下良氏（木下 2009）、落合康浩氏（立石 2012）がそれぞれ

れ考察している。本稿では先学の研究に学びつつ、朝明駅と榎撫駅の2駅の位置を再検討し、諸説ある朝明駅—榎撫駅間の東海道のルートに新たな考察を加える。

I. 朝明駅

朝明駅は、四日市市大矢知に位置する久留倍遺跡に比定したい。この遺跡は郡家とする説が一般的であるが、現段階で郡家と確定することは難しく、駅家である可能性も十分に考えられる。官衙でありながら、南ではなく東を向く構造をとるのは、遺跡の東側を通る駅路側を正面としたためであろう。ちなみに、久留倍遺跡と同様に南面せず、駅路側を正面とする構造の駅家は、他にも数例報告されている。

II. 榎撫駅

榎撫駅に関しては、『日本後紀』弘仁

3（812）年5月乙丑（8日）条に「伊勢国言、傳馬之設、唯送新任之司、自外無所乗用、今自桑名郡榎撫駅、達尾張國、

既是水路、而徒置傳馬、久成民勞、伏請從停止、永息煩勞、許之」という記述がある。「榎撫駅には国司が赴任したときに使用する馬を備えていたが、尾張国とは水路で行き来するので、馬の維持管理が大変なため、これを廃止した」という内容であり、榎撫駅から船で尾張へ渡っていたことがうかがえる。この榎撫駅は、桑名市多度町戸津に比定したい。現在の地形のみに注目すると、戸津地区が港であった痕跡は見出しにくい、そこから北へ約1.3kmの位置にある柚井遺跡では、古代の泥炭層（スクモ層）が発見されている。この地層は、入江のような地形に土砂が堆積して形成されるものであり、海に近接していたことを示している。

また、渡津が転訛して「戸津」に、江津が転訛して「榎撫」になったという説もある。具体的には、榎撫駅を多度町戸津の尾津神社付近に推定しておく。近辺には、かつて港であったことを思わせる舟着神社や、日本武尊が東国遠征の際に、この地から船で尾張へ渡ったという伝承も残っている。

III. 朝明駅—榎撫駅間の東海道ルート

朝明駅から榎撫駅までのルートには、丘陵部の西側を通る「丘陵部西ルート」（緑色）と、海岸部を通る「海岸部ルート」（青色）の2説がある。これらに加え、今回新たなルートとして「丘陵部東ルート」（赤色）を想定した（図1）。丘陵部西ルートは多度神社を経由するため、西側に大きく迂回する。しかし、駅路は基本的に直線志向するので、わざわざ多度神社を経由する必要は乏しい。また、海岸部ルートは、朝明駅—榎撫駅間を直線的に進むルートに比べてかなり大回りとなる点、この付近に遺跡が少ない点、そしてあまりにも当時の海岸線に近い点から疑問が残る。

一方、丘陵部東ルートの場合、朝明駅から北へ向かい、西ヶ広遺跡と菟上遺跡の間を抜けて、額田廃寺のすぐそばを通る。この額田廃寺は法隆寺式の伽藍配置を有し、川原寺式軒丸瓦が出土することから、壬申の乱ゆかりの寺院とされる。そこからさらに北へ進み、

多度町天王平遺跡を通過して榎撫駅へと至るが、地形的にも無理のないルートといえる。ルート沿いの古代遺跡も多く、これが古代の東海道であった可能性は高いといえる。

おわりに

今回は、朝明駅—榎撫駅間のルートを見つけ出す方法として、国土地理院の航空写真を用いて道路の痕跡を辿った（図2）。現在では高速道路建設や宅地開発によって山が切り崩されているので、地形から道の痕跡を辿ることは困難であり、今後の発掘調査で新たな遺跡が発見される可能性も低い。そのため、桑名市内の開発以前の航空写真を使用した。（指導教員／小澤毅）

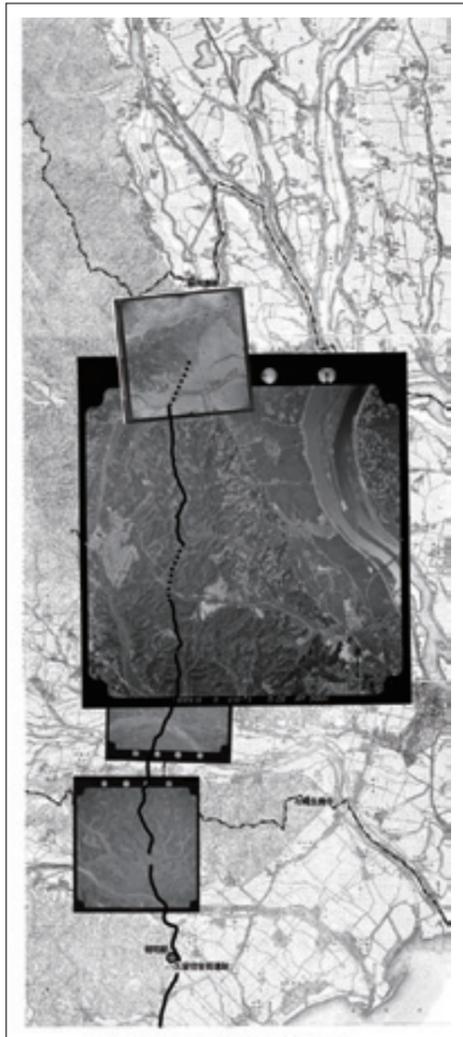


図1 朝明駅—榎撫駅間のルート調査法

参考文献
石神教親 2013「桑名郡家と榎撫駅家」『ふびと』第64号、三重大学歴史研究会、木下 良 2009
『事典 日本古代の道と駅』吉川弘文館
『日本古代道路事典』八木書店
清水靖夫・小林茂編 2003
『正式二万分之一地形図集成』柏書房
鈴鹿市教育委員会 1996『鈴鹿市埋蔵文化財調査報告Ⅳ』
武部健一 2004
『完全踏査古代の道 畿内・東海道・東山道北陸道』吉川弘文館
立石友男ほか 2012
『地図でみる東日本の古代』平凡社
多度町史資料編1 考古古代・中世
藤岡謙二郎 1978
『古代日本の交通路1』大明堂
山中章 2012『東海道朝明—榎撫駅小考』
『三重大史学』第12号
四日市市教育委員会 2013
『久留倍遺跡5』

近世輪中地域の新田開発と洪水対策

— 宝暦治水の意義 —

稲垣 勝義

人文社会科学研究科
地域文化論専攻
歴史学



木曾三川展望タワーより、桑名市内、千本松原を望む

はじめに

桑名市域である木曾岬、長島の輪中地帯は、木曾三川の大量の水と共に流れ込んだ土砂が寄り洲を形成し、そこを開拓して人が住み着いた場所である。さまざまな形で水と生活を共にして暮らしてきた土地であるが、一方では、毎年のように洪水の被害にみまわれた地域でもある。

江戸時代中期以降に急速に河口付近に輪中が開発されてからは、中・上流域でも多くの水害が発生するようになった。上流域の美濃国内の村々から下流域の桑名藩領を相手取り、洪水をめぐる訴えが出され、次第に治水の課題は三川流域全体に拡大していった。幕府がその対策として薩摩藩に命じた難工事が、「宝暦治水」である。だが、その後も洪水被害は頻発し、決して治水問題が解決したわけではなかった。

I. 輪中地域の 新田開発と 様々な争い

木曾三川流域の中流域に位置する長島輪中は、一七世紀には一部を除き、ほとんどの開発が終わっている。その後一八世紀に一時停滞するが、一九世紀に入ると河口付近の輪中を中心に新田開発が急速に進んだ。輪中の新田開発が進むと石高は増大するが、川幅が狭まり、流れ込む土砂の堆積により河床が上昇し、河川の水流が停滞するようになる。その影響

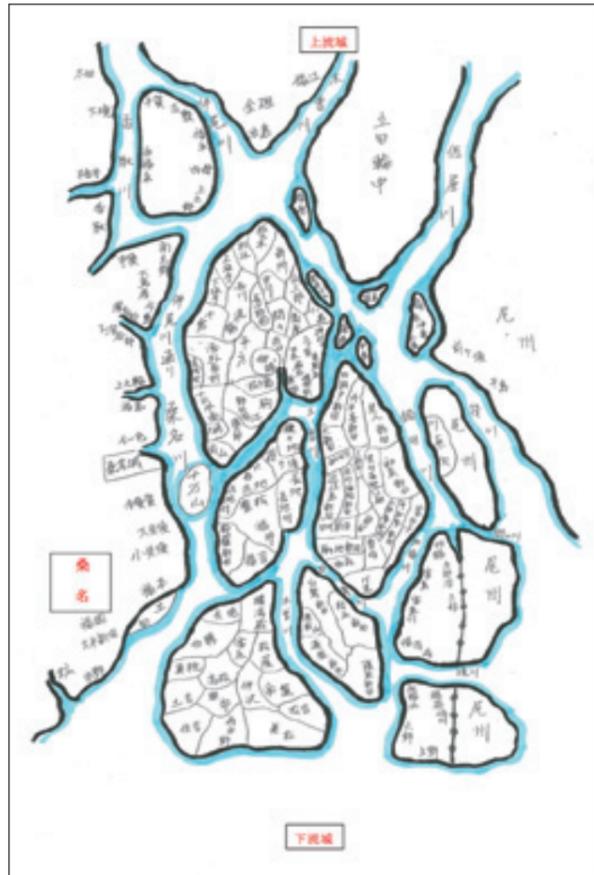
で上流域において洪水被害が頻発するようになった。

輪中に新田開発が進むと、土地や洪水被害をめぐる争い事が発生するようになる。河口付近は尾張藩、桑名藩、長島藩、幕府領の入り組んだ土地であり、川であった所が地続きになると境界争いが起きてきた。また上流域に洪水被害が出ると、下流域での新田開発が原因であるとして、川幅の拡張、新田の取り払いの訴願が上流域の美濃国の村々から出された。さらに洪水被害が広範囲になると、個々の村々では対応できず、多くの村々が連携し、幕府に対して根本的な治水工事を要求するようになってきた。

II. 一洪水対策の治水工事

江戸時代の治水政策は、①公儀普請、②御手伝普請、③国役普請、④自普請の四種類に大きく分類される。幕府は頻発する木曾三川流域の洪水被害に対し、本格的な治水工事を御手伝普請として行うことを決定した。それが薩摩藩に命じた「宝暦治水」である。

木曾三川は地形的に木曾川が一番高い位置にあり、長良川、揖斐川の順に土地が低くなっており、洪水が起きると水は木曾川から揖斐川へ向かって流れ落ち、三川が混濁して被害を大きく



〔長島町誌上巻〕を参考に作図

していた。地域住民も幕府も、これが洪水の大きな原因であると認識しており、それぞれの川を分流させようと企てた。油島、松の木間を締切堤、大樽川には洗堰を設置するなどの難工事で、二年の歳月をかけ、約四〇万両という多額の費用を掛けて工事は竣工した。薩摩藩からはおよそ千人の藩士をこの地に派遣して従事させたが、病死や工事後の割腹で命を落とす藩士も少なくなく、多大な犠牲を強いられた。

だが難工事であったにもかかわらず、

その後も洪水の被害は収まらず、御手伝普請が何度も実施されている。東北地方から九州まで約六〇余りの諸大名に命が下されており、決して薩摩藩だけが特段に重い負担を負わされたわけではなかった。その後の工事は、堤防の補強工事や浚渫などで小規模のものばかりであり、明治時代に入って大改修工事が行われるまで洪水被害は続いた。

おわりに

宝暦治水事業において三川分流が完全

だが、デレーケの行った工事の方針自体は、必ずしも目新しいものではなかった。宝暦治水以前にも、美濃の代官で幕府に対して「三川分流」の重要性を建言する者があり、また美濃の流域農民たちも「三川分流」を主張していたのである。だが、領地関係の複雑さから、江戸時代には完全な工事の遂行は妨げられた。「三川分流」の構想自体は、西洋人の技師デレーケを待たずとも成立していた。宝暦治水が目指したものは、近代の本格的な三川分流工事に、理念としてつながる歴史的意義を持っていたのである。

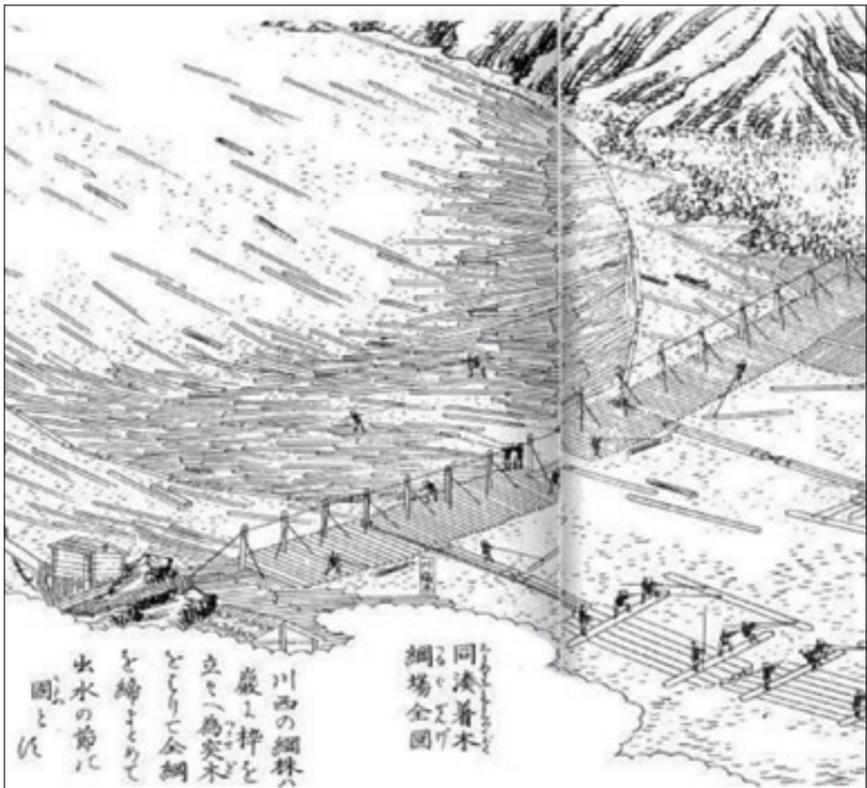
(指導教員/塚本明)

材木流通から見た桑名

— 廻船問屋佐々部家の史料から —

萩井 真美

人文社会科学研究所
地域文化論専攻
歴史学



「運材図会」より「下麻生綱場全図」
(徳川林政史研究所蔵)
左上が飛騨川上流部で管流しをしており、右下では筏を組んでいる様子を描いている。

はじめに

桑名は中世より商業が盛んな港町として栄え、近世にもたくさん荷物を運ぶ船が行き来していた場所であった。特に材木流通では、桑名は生産地と消費地を結ぶ役割を果たした。生産地の多くは飛騨・木曾・美濃で、桑名とは木曾三川で結ばれていたが、消費地は江戸・大坂が多く、海上輸送によって運ばれていた。本稿は、飛騨・木曾の材木流通から木曾三川と海を結ぶ桑名の役割について考察する。

分析にあたっては、桑名市博物館に所蔵されている約三万点にもものぼる「佐々部家文書」を用いる。佐々部家は、代々佐々部茂左衛門を当主として桑名で活躍した商家である。茂左衛門は自らを「材木屋」あるいは「廻船問屋」と称しており、材木を中心に扱う廻船問屋という立場であった。

I. 木曾三川より桑名への材木輸送

河川の材木運搬では、川幅の狭い上流部では材木を一本ずつ流す管流しが用いられ、川幅が広がる下流部で材木を筏に組み、筏流しで運ばれた。しかし海上の運搬では、船に積んで運搬するため、港である桑名では筏の解体、材木の積み替えという役割があった。

木曾の材木は木曾川の上流部の支流流域から伐り出され、本流まで材木を下ろし、管流しで錦織という地まで下ろして筏を組み、桑名まで筏流しで下ろす。一方、飛騨の材木については、飛騨川・馬瀬川流域で伐り出されて川まで下ろし、管流しで飛騨川と木曾川の分岐点近くの下麻生という地で筏を組み、飛騨川・木曾川を経由して、桑名まで運搬した。

名古屋の熱田の近くにある白鳥へも、

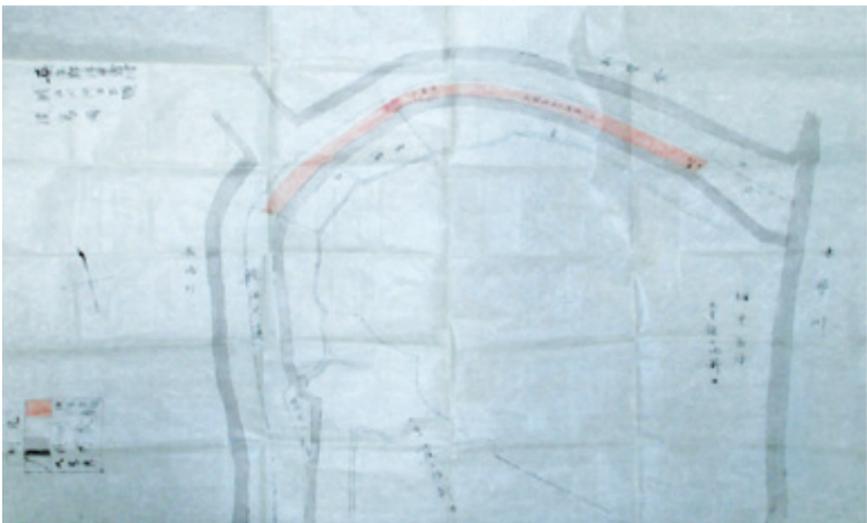
桑名と同じように材木が運搬されていた。幕府が慶長十六(一六一一)年に名古屋と熱田を結ぶ堀川を開削し、白鳥に貯木場を設置したことで、材木の集積地として利用され始めたのである。当初は尾張藩のみが使用していたが、徐々に民間の材木商たちも白鳥を拠点にしはじめた。しかし、佐々部氏のように桑名を拠点とした材木商もおり、材木運搬を担当する材木商がどちらを拠点とするかによって、運ばれる場所が決まったようである。

II. 材木運搬における桑名の役割

「佐々部家文書」の「飛州御用材木一件」のなかで、飛騨の下呂村から桑名まで運搬を担当した湯之嶋村の久兵衛という人物が、桑名は材木を扱い、管理するのにいかに適しているかを記している。

その理由としてまず貯木場の存在をあげている。佐々部氏自身も他の文書で、貯木場は材木を扱うために最も重要な施設だと記している。

貯木場はまず、材木を送り手と受け手の仲介のため、一旦預かっておく場所として用いられた。また、林業には筏を組み、川下しをするなどそれぞれ



の作業の時期が決まっているが、材木の需要は一年中あるため、いつでも販売することができるように貯木しておく必要がある。そして材木は、大抵

「桑名郡伊曾島村鱒江川出願模写図」
(「佐々部家文書」桑名市博物館蔵)
朱塗りの部分が明治二十七年(一九〇四年)に佐々部家が貯木場として申請した部分。

は入札によって販売されたが、落札者を募るまで材木を置いておく場として、貯木場が求められたのである。

材木流通には材木商と廻船問屋とが必要だが、桑名の佐々部氏はまさにその両方を担っていたのであり、加えて同氏は貯木場を所有していたことも重視されている。

湯之嶋村の久兵衛は、貯木場の手当てとして、洪水・高波などに対応して貯木場が設計されていることを評価している。またそうした非常事態の際に、町をあげて対応できるように町役人と交渉がなされていたことも重視された。

近代に入ってから、桑名の貯木場に大きな変化が見られる。明治十二(一八七九)年、新たに旧桑名城跡に官設の貯木場が設置され、ここでの取引に桑名の材木商たちも参加した。一方、お雇い外国人デレーケによる木曾三川改修工事により輪中の土地が削られ、佐々部家はその地を持っていた貯木場を失った。佐々部家は、その代替地として長島輪

おわりに

材木流通において桑名の地は、木曾三川から流されてきた筏を解体し、荷物を船に積み替えることで、川と海とを中継し、材木の生産地と消費地をつなぐ役割を持っていた。

材木流通において欠かすことの出来ない設備が貯木場であり、桑名ではそれを所持している佐々部氏が重視された。佐々部氏は材木屋であり廻船も扱うことが出来た人物として、江戸時代の材木流通には欠かせない人物だったのである。

(指導教員/塚本明)

【謝辞】
史料の閲覧については、大塚由良様、鈴木亜季様をはじめ、桑名市博物館の皆様にお世話になりました。



資本主義の現在

資本蓄積の変容とその社会的影響

文理閣 2015年発行

豊福 裕二 人文学部 教授 産業経済論

1. 理論と現実をつなぐ

本書は、いずれも大学で教鞭をとる比較的若手の研究者らと共に、学生向けのテキストとして執筆したものである。私自身、大学で学生に講義をするようになって10年以上になるが、常日頃感じているのは、学生に理論を教えること、理論に関心を持たせることの難しさである。いうまでもなく、現実の諸問題に対して適切な施策を講じるためには、その諸問題が生じた原因を探り、その背後にある法則、原理を理解しなければならぬ。しかし、経済学の理論は、どうしても抽象的な議論から入らざるをえず、丁寧に教えるようであれば、現実に近い応用分野に行き着く前に

時間切れになってしまうことがしばしばである。また、最近の学生の傾向として、話が抽象的になるとたんに興味が削がれてしまうという問題がある。今日の世界や日本で生じている具体的な諸現象、諸問題を入り口にしながら、その背後にある法則を理解することの意義を感じ取ることできるような、言い換えれば、理論を学ぶためのきっかけとなるようなテキストを作れないだろうか。それが私を含めた執筆陣の問題意識であった。

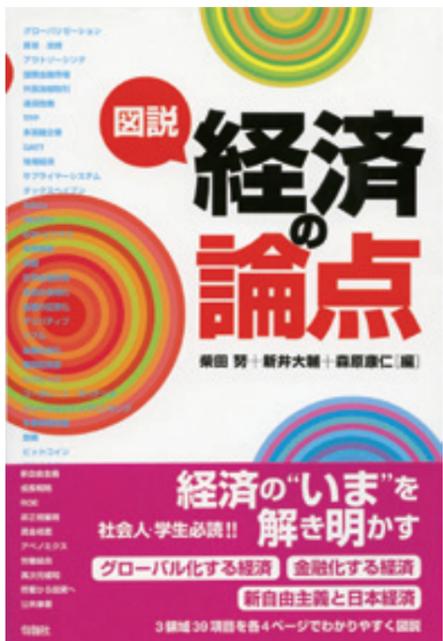
2. 資本主義の“現在”を考える

本書が対象としているのは、現代の資本主義社会

のもとで生じている諸問題、とりわけ、日本社会の諸問題である。第1部では、最近の資本主義経済を特徴づけている諸現象、諸問題として、大企業の生産体制、トヨタ生産方式、サービス経済、規制緩和、流通業、会計制度、環境問題などを、日本あるいは世界の事例をもとに取り上げた。また、第2部では、ブラックス企業問題、外国人労働者問題、農業・食料問題、地域間格差、税制改革、労使関係、共同体など、日本社会の身近な問題を幅広く取り上げるようにした。

各章では、理論を意識しつつも、あまり難解にならず、できるだけ平易な叙述を心がけた。しかし、それだけでは理論と現実との橋渡しにはなりづらい。そこで、各章よりも若干理論を意識した全体の見取り図を序章で与え、そこで用いた理論的な用語について補論で説明を加えることにした。私の担当した序章では、現代の資本主義経済の特徴とは何か、ということを示すため、戦後の資本主義経済の歩みを振り返ったうえで、あらためて現代の特徴づけを行っている。扱う問題の幅広さから、自分の専門領域を大きくはみ出すことになってしまったが、歴史的な視点から現在の時代状況を捉え返してみることが学生にとっても大切ではないかと思ひ、あえて大胆な概括を行っている。この序章の成否も含めて、編者としていろいろ反省点をあげればきりが無いが、本書をきっかけとして、少しでも多くの学生が、経済学の理論に興味を抱いてくれれば幸いである。

語を自新 る 著刊



図説 経済の論点

柴田 努+新井大輔+森原康仁 編

旬報社 2015年発行

森原 康仁 人文学部 准教授 多国籍企業論

経済問題を平易な言葉で語る

「できるかぎりわかりやすく現代経済を解説した入門書を、若い書き手で作る」。こうした目的のもとに、本書の企画がスタートしたのは2013年10月のことでした。

ふつうの人の経済・産業問題にたいする印象は「とにかく話がむずかしい、とっつきにくい」というものです。その理由は、用いられる術語が日常用語とかけ離れているというだけではありません。その理解に構造的な視点が欠かせず、ふつうに生活するなかでも実感とは多かれ少なかれ乖離するからです。また、高校生や大学生など学生のみならずにとつては、そもそも日常世界と経済活動が分離しているという事

情もあります。

こうした事情をふまえて、本書の企画はスタートしました。

経済現象も人間と人間のつながりがうみだす

ところで、政治や文化と同様に経済もまた人間と人間の「つながり」がうみだすものです。それだから、それは人間のもつ主体性によって変えることができます。いかに目の前の現実が構造的で固定的にみえようとも、それはべつべつの仕組みに開かれていくはずだ――編者もふくめ、本書の執筆に参加した書き手が共有しているのは、こうした批判的な視点で

した。

「経済や産業問題を自然的で動かしがたいものとはみない」ということが本書の特徴となっています。

1冊で経済の現状をつかめる

こうしたコンセプトのもとに、本書は、グローバル化、金融化、日本経済の現在という3つの大きなテーマのもとに39のテーマを配置し検討しています。「グローバル化」については、企業の国際生産と通商体制、マーケティングの国際化と金融グローバル化、グローバルな貧困問題、対外援助は有効に機能しているか、といった問題が扱われます。

「金融化」については、そもそも経済の金融化とはなにか、投機取引とデリバティブ、金融自由化と「規制の民営化」、金融機関のビジネスモデルとその変容、「異次元緩和」が増幅する国債市場のリスク、といった問題が扱われます。これさえ読んでいただければ難しい金融問題について読みとくことができるようになる編集にしています。

「日本経済の現在」については、1990年代以降の日本経済の構造変化の特徴を整理したうえで、労働・雇用・賃金問題、財政・金融政策の現状を総合的に整理しています。女性労働や「アベノミクス」の検討といった現状をみるうえで欠かせない具体的問題を取り上げていく点に特徴があります。

語を自新 る 著刊



「もしも?」の図鑑 忍者修行マニュアル

実業之日本社 2015年発行

山田 雄司 人文学部 教授 日本古代・中世信仰史

忍術を身近に

本書は主に小学生を対象として、忍者とはどのような存在か、いかなるときにどのような忍術を用いたらよいかということについて書いた書である。全ページにわたって、マンガや写真などで、わかりやすく忍者となるために必要なさまざまな知識について紹介している。一〇歳の少年イオリのママは忍者で、イオリが物置を掃除していたときにたまたま忍術書を発見し、そこから忍者修行を始めることになる。

湖の上を歩いて渡ってお弁当を届けに来てくれたという話が紹介され、実際に水ぐもでも水の上を歩けるのか、そして、その他さまざまな水の渡り方についての解説がなされる。こうした忍術の内容は、忍術書である『万川集海』や『正忍記』などを根拠としており、実際に忍者が用いた術であったと考えられる。

これまでも子ども向けの忍者や忍術を扱った書は多数刊行されているが、本書では伊賀連携フィールドで研究された最新の研究成果が反映されている。すなわち、「手裏剣の真実」として、忍者は手裏剣を使っていなかったことや、くノ一と呼ばれる女性忍者が戦いに参加することはなかったことを指摘しておいた。

本書への想い

本書のあとがきに、私は次のような文章を書いた。誰でも知っている忍者ですが、忍者の本当の姿はよくわかっていません。あるときには堀を渡って堀を飛び越え、あるときには印を結んで呪文を唱えることで消えたり、あるときにはガマに変身したりする忍者とは一体何者なのでしょう。じつは、忍者の任務・姿・持ち物などは時代とともに変わってきており、本当の姿がわからないからこそ、それぞれの時代でそれぞれの人が忍者を想像して造りあげてきたとも言えます。さらに、忍者の人氣は日本だけにどまらず、世界の人々を魅了していますが、それぞれの国でイメージされている忍者もやはりさまざまです。

本書では、忍者・忍術のもつさまざまな側面について書いてあります。本書を読んで知識を身につけたみなさんは、ぜひ野外に出て実際に体験してみてください。すると、新たな発見がたくさんあるでしょう。忍者の知恵の中には、当時生きた人の知恵がたくさん詰まっています。先人に学んで、みなさんの生活に役立ててもらえたらうれしく思います。

子どもたちにはぜひ外に出て、草のにおいをかき、風を感じ、さまざまな体験してもらいたいと思っただけの文章である。パーチャルな世界が広がる中、これからの世の中を担っていく子どもたちには、身体的感覚を大事にして自然とふれあってもらいたいと思う。

語を自新 る 著刊



はじめての言語獲得 — 普遍文法に基づくアプローチ —

岩波書店 2015年発行

杉崎 鉦司 人文学部 教授 言語心理学

生成文法理論との 出会いから本書へ

ある教員との出会いがその後の人生を決定するというのはよくある話だが、本書はまさにそのような背景に基づくものである。

他の教科より英語が得意という単純な理由によって外国語学部の英語学科に進学した私にとって、進学先で生成文法理論と呼ばれる言語理論の素晴らしい研究者に出会うことができたのは、本当に幸運であった。梶田優先生は、ノーム・チョムスキーの創始した生成文法理論が「なぜヒトは母語の知識を身につけることができるのか」という問いを中心課題に設定していること、及びその

問いに対して「ヒトには生得的に母語を獲得するための仕組み（普遍文法）が備わっている」という仮説を立てて説明を与えようとしていることをわかりやすく議論してくれた。学部生の私は、世界の言語に見られる普遍性を基に普遍文法の存在を仮定するという議論に半信半疑であった。大学院に進学後、大津由紀雄先生と出会い、幼児を対象とした言語調査を行うことで普遍文法の存在に対して証拠を与えようとする大津先生の研究に心から魅了され、「自分がなすべきことはこれしかない」という思い込みから、普遍文法に基づく母語獲得研究の道に進むことを決意した。留学後、幸運にも三重大学人文学部に採用され、その後10年以上にわたって授業で議論してきた「普遍文法に基づく

一つの問いを深く広く

母語獲得研究」の基本的な成果をまとめたものが本書である。

本書は、上記のような背景から、母語獲得研究の入門書としてはやや異質な部類に入る。一般的な入門書であれば、幼児が発話する文における語の並び順やそれらに伴う意味、幼児の発話に見られるさまざまな種類の誤り、まわりの大人が幼児に話しかける際の特徴など、多岐にわたるトピックに関して基本的な観察を整理した内容を含むであろう。本書は、それらの大部分を扱うことなく、普遍文法に含まれると仮定されるさまざまな属性と実際の母語獲得過程とがどのように関わり合うのかに焦点を絞り、その問いを扱った研究事例を数多く紹介する内容となっている。また、十分な理解を伴って事例を提示できるようにという思いから、私自身の行った研究についてできる限り多く言及するように心がけている。このように、一つの問いに絞って深く広く扱うことにより、普遍文法に基づく母語獲得研究に初めて触れる学生から、生成文法理論を専門とする研究者まで、幅広い読者に読んでもらえることを目指した。本書を通して、一人でも多くの読者に普遍文法に基づく母語獲得研究のおもしろさが伝われば幸いである。

語を自新 る 著刊



山里の風景(津市、旧美杉村)。周囲の森はほぼ全てが人工林である

三重の森林と林業

安食和宏 人文学部教授 人文地理学

1 三重県の森林の6割は人工林

日本列島の天然の森林植生は、大きく3つに区分される。北海道の亜寒帯に分布する常緑針葉樹林と、東日本の冷温帯に分布する落葉広葉樹林(いわゆるブナ林、ナラ林)、そして東く、西日本の暖温帯の常緑広葉樹林(いわゆる照葉樹林)である。三重県の多くは、三番目の照葉樹林帯に属し、「自然の」状態では、シイ、カシ、クスノキ、ツバキなどが多く見られるはずである。しかし、今私たちが見ている森林は、ほとんどが「人工の」森林である。「人工林」とは、人間の手によって植えられ育てられた森林を指す。私たちが三重県で目にする森林は、スギもしくはヒノキから成る場合が多い。こうした森林を見て「自然は美しい」という人も多いだろうが、これらは、人間が一本ずつ苗木を植えて、何十年あるいは何百年に渡って手を加えて育ててきた「人工

2 歴史の古いヒノキ林業

毎年収穫のある農業とは異なり、林業の場合はタイムスケールが極めて長くなる。林業においては、植林→下刈り→除伐(場合によってはつる切り、枝

打ち)→間伐→主伐という行程を50〜60年(場合によっては80年以上)程度で繰り返す。気の遠くなるような話だが、こうして受け継がれてきた日本林業の歴史はかなり長い。表1より、人工林率ランキングで上位の県は全て、東海・近畿・四国・九州地方に位置することが分かる。人工林率が高い、すなわち林業の歴史が長いのは西日本であるという、大まかな地域性が読み取れる。

三重県の場合も林業の歴史は非常に古い。その代表が、県南部のヒノキ生産で有名な「尾鷲林業」である。歴史的にみると(注2)、尾鷲市を中心としたこの地域は、温暖多雨であり、林産物の運搬に適した天然の良港が多いという恵まれた条件を有し、近世以後に育成林業の発展をみた。当時この地域を領有

していた和歌山藩は、林産物の商品化による藩収入の確保に積極的であり、住民による人工造林は17世紀前半から記録されている。その後、大山林所有者や地元商人層の積極的な経営により、林業地域としての発展が見られた。表2によると、今でも三重県はヒノキ生産においては全国有数の生産量を誇っていることが分かる。こうした数値は、数百年にわたる時間と人間の労力の重みに支えられてきたものである。

3 環境調和的な林業を求めて

近年、環境に配慮した適切な森林管理が行われているかを第三者機関が認証する森林認証制度が広がりを見せて

いる。国際的によく知られているのが、1993年に設立された国際機関FSC(Forest Stewardship Council:森林管理協議会)によるFSC認証である。この認証森林から生産された木材・木製品にはラベルをつけて販売することができ(図1)、それにより、製品の信頼性を保証する仕組みである。このFSC認証には、森林管理に関する認証と、林産物の加工・流通についての認証の2種がある。現在(2016年1月)の認証状況を見ると(注3)、森林管理に関する認証(Forest Management認証)は、世界全体で80ヶ国に及び、計1,365件の認証が取得されており、その森林面積は約1億8600万ヘクタールに達する。日本国内では、最初に(2000年2月)こ

の認証を取得したのが、三重県紀北町で積極的な林業経営を展開している「速水林業」である。現在、国内での森林管理認証は計33件であるが(森林面積は約39万ヘクタール)、その中の4件が三重県内の事業者の認証である。三重県の林業関係者は、林業の歴史性を基盤としつつ、こうした新たな制度にも積極的に取り組んでおり、今後の動向もまた注目される。

(注1) 林野庁のHP
http://www.rhin.yamanagi.go.jp/keikaku/genkyou/h24/1.html(2016年1月18日閲覧)
(注2) 笠原六郎(1988)「尾鷲林業 三重県編 三重県林業史」三重県、p.845-862。
(注3) FSCのHP
https://ic.fsc.org/ およびFSCジャパンのHP https://jp.fsc.org/jp-jip (2016年1月20日閲覧)



鈴鹿山脈の積ヶ岳。三重県の高地に登れば、東日本のような落葉広葉樹林の紅葉が楽しめる

■表1. 県別の人工林率(2012年)

順位	県名	人工林率
1	佐賀	66.4
2	高知	65.3
3	愛知	64.5
4	福岡	64.0
5	三重	61.8
6	媛	61.4
7	徳島	61.0
8	奈良	60.6
9	熊本	60.5
10	和歌山	60.4
	全国	41.0

(単位は%) 林野庁「森林資源現況調査」資料による

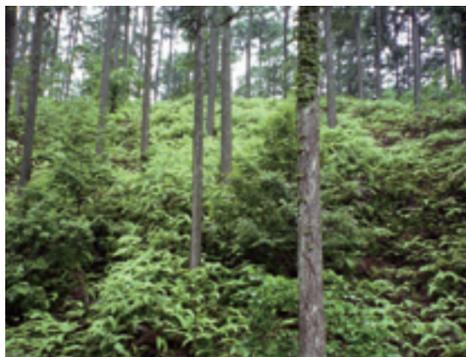
■表2. 県別のヒノキ(素材)生産量

順位	県名	2011年		2012年		2013年	
		生産量	県名	生産量	県名	生産量	
1	愛媛	181	岡山	199	岡山	222	
2	岡山	179	熊本	196	熊本	218	
3	高知	172	高知	174	高知	195	
4	熊本	156	愛媛	160	愛媛	184	
5	三重	135	三重	131	大分	151	
6	大分	131	大分	119	三重	125	
7	静岡	119	岐阜	119	三重	123	
8	岐阜	108	静岡	101	静岡	116	
	全国	2,169	全国	2,165	全国	2,300	

(単位は千立方m) 農林水産省大臣官房統計部編「木材需給報告書」による



図1. FSC認証ラベル



FSC認証を取得した速水林業のヒノキ人工林(紀北町)。下草が多いのが特徴的である

ミクロデータによる設備投資の実証分析

嶋 恵一 人文学部教授 計量経済学

マクロ経済と ミクロレベルの投資

マクロ経済の大きさは、GDP (Gross Domestic Product: 国内総生産) という尺度で測られますが、その拡大と縮小とを眺めたものを景気変動と呼びます。景気の拡大期には消費や投資の増加が伴い、その後退期には消費と投資が減少することは容易に想像できると思います。消費はGDPを構成する中の6割を占める重要なフアクターですが、景気後退期におけるその縮小は緩慢で、所得の低下ほど消費は落ちないことが各国のマクロデータによる実証研究から知られています。一方、投資の変動は景気変動との相関が消費の変動よりも大きく、後退期には極めて大きな落ち込みを示します。景気回復を狙い、現政権は投資に着目し、いかにマクロレベルで投資を増加させる

かという観点から経済政策を考えているものと思います。その一つが、法人税率の引き下げに当たります。その政策は、法人減税により企業の投資が拡大し、雇用や需要の増加が見込めるという予想に基づきます。

GDPに占める投資の大きさは今では2割程度ですが、長期的にその比率は減少傾向にあります。国内で消費される日本企業の製品は、相当数が中国やアジア諸国で製造され逆輸入の形をとることを直観的にご存知だろうと思います。日本企業が供給の最適化を考えると、価格競争が熾烈なほど生産コストの削減を進めるはずですが、労働コストが安い発展途上国に最新の設備を建て、日本を含む先進国へ出荷する製品を集約して生産すれば、国際的な価格競争に勝ち、正の利益を生む確率は増加すると思います。多くの日本の製造業が同様に考え、国内の工

場を閉鎖しアジア地域の途上国に生産拠点を移しました。長期のマクロデータから観察される国内投資の減少傾向にはそのような理由があり、その趨勢に逆らい国内投資を回復するには、極めて精密な経済政策の設計が求められるはずですが、そのためには、企業というミクロレベルの主体の経済行動に関する理論付けを再度やり直し、詳細かつ精度の高い統計データを活用して実証分析による証拠を蓄積する必要があります。

設備投資に関する 共同研究プロジェクト

この数年は一橋大学経済研究所で共同研究プロジェクトを組み、企業の設備投資に関するミクロデータの実証分析とミクロレベルの設備投資に関する理論の再構築を集中的に行っています。2013

年に当時同研究所の所長だった浅子和美教授の粋な計らいで経済研究所の客員教授に雇用してもらえたことを契機に同じ分野の研究メンバーが定まり、翌年から共同研究を始めることができました。ボスである浅子先生をはじめ、日本政策投資銀行設備投資研究所の中村純一副所長、神奈川大学の外木好美助教という大変優秀な共同研究仲間恵まれ、協力して膨大なミクロデータの準備作業と実証分析を進め、ミクロレベルの設備投資行動の解明を目指しています。上場企業有価証券報告書の財務・役員構成データベースに加え、財務省『法人企業統計調査』の個票データ、内閣府『企業投資除却調査』の個票データの利用許可があり、詳細かつ広範なミクロレベルの設備投資に関する研究を進めています。

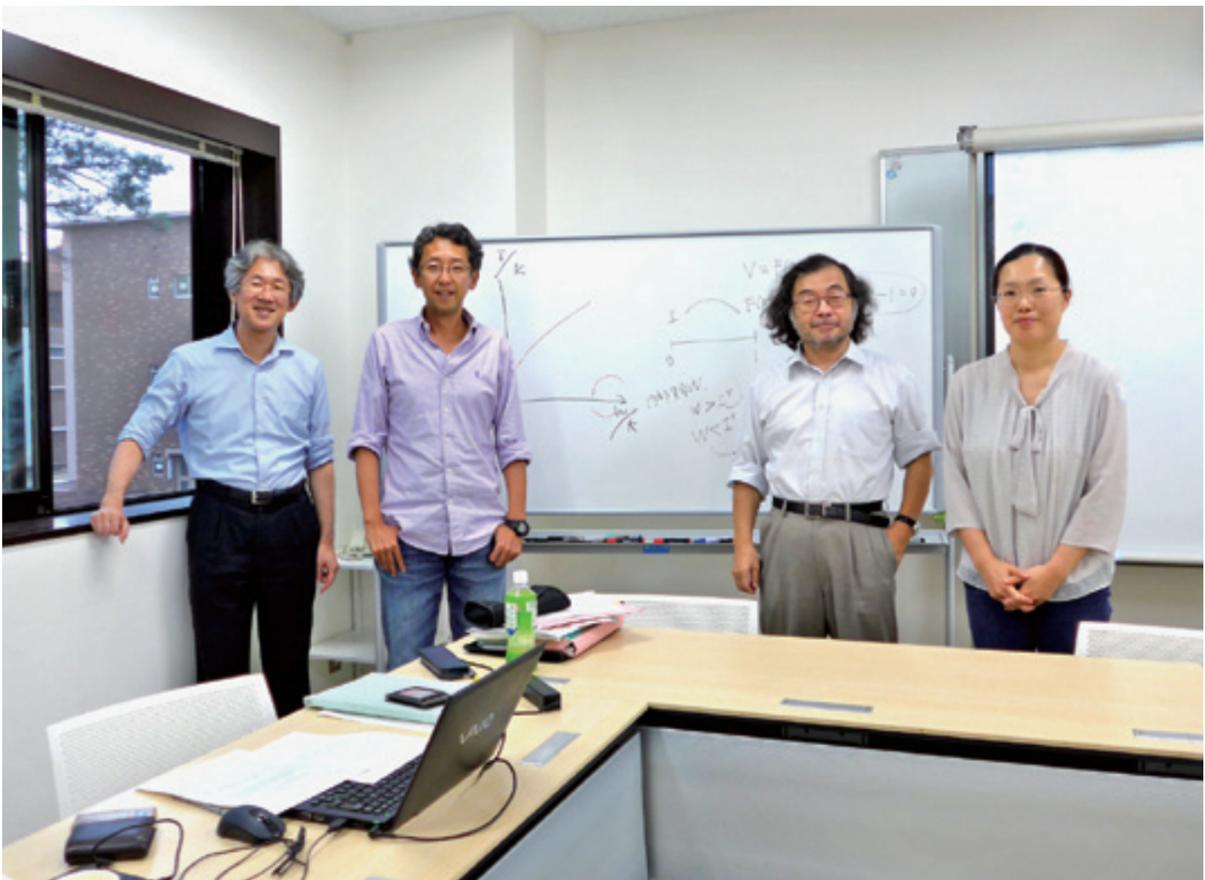
企業が投資を行う判断は、投資費用を上回る投資価値が見出せるか否かにかか

ります。投資費用は投資を実施する際に支払うのに対して、投資価値はその後の長い年月にわたって回収される利益の総額を指します。投資価値には時間の概念が加わるため、将来の利益を時間の長さに応じて割り引き、現在価値に変えて評価します。将来回収される利益の割引現在価値の和が投資価値であり、そこから投資費用を引いたものをNPV (Net Present Value: 純現在価値) と呼びます。NPVに基づき、投資価値の年ベースの収益率を計算したものを内部収益率と呼びます。これを企業の資金調達コストと比較し、投資収益率が資金コストを上回るかぎり、そのプロジェクトを実施するというのが投資基準になります。大企業ではそれが財務担当役員の仕事であり、その計算結果を踏まえて経営陣が新規投資の判断を下します。客観的にいえば、米国のミクロデータによる多数の実証研究から、企業は設備投資に対してかなり慎重で、資金コストをはるかに上回る、ある水準以上の投資収益率が見出されなければ投資を実施しないことが統計的に明らかになっています。

通常の資金コストを大きく上回る、ある水準はハードレートと呼ばれ、それが多数の大企業の投資実施の判断を規定し、投資の収益率がハードレートを超

えない限り投資は見送られてきたものと考えられます。国際比較による実証研究もあり、日本と欧州の上場企業は米国企業よりもハードレートが低いことが判明しています。すなわち、誤解を恐れずにいえば、国際比較において日本企業は投資が旺盛であり、投資の判断が緩いことを意味します。先進国の中でも日本は不況が長く、しばしばそれは日本企業が低いハードレートを採用し冗長な資本ストックを持つ投資行動をとることと密接に関わると我々は考えています。法人税率の引き下げのみによりマクロレベルの投資を増やすというのは政策として正しくなく、投資の収益性を増加させるべく、企業が行う投資のクオリティを上げるためのミクロレベルの政策検討が必要だと思えます。その証拠と理論付けを提示すべく毎日研究を続けています。

共同研究メンバー: 左から中村、嶋、浅子、外木(一橋大学経済研究所にて)



地中海の真ん中で考えたこと 難民たちの生と死と「私」

北川真也

人文学部准教授 人文地理学

二〇一五年五月初旬、私はイタリア・ランペドゥーザ島にいた。ちょうど、地中海をわたってヨーロッパへと向かう移民・難民のことが、日本でも伝えられるようになっていた時期である。しかし、アフリカ大陸にほど近い地中海のこの島は、すでにおよそ二〇年にわたって、移民・難民が最初に足を踏み入れるヨーロッパであり続けてきた。

滞在中、私はよく友人のビザ屋で知人たちと夕食をとっていたが、ある晩「いま島に移民を乗せた船が到着している」と、誰かが教えてくれた。すぐさま数人が自転車で埠頭へと向かった。私は走って向かった。一〇分ぐらい走っただろうか。埠頭の近くまでたどりつくと、そこには先ほどの知人たち、カメラを回す数人のメディア関係者、さらには移民排斥をとる政党の旗をふる人たちがいた。しかし、埠頭のなかには入れない。

る世界性にかすかでも触れたことから生じているのは明らかだった。

なぜ、船に乗り込めるのか。難破する危険にみちた旅というのに。なぜ、巨大な砂漠を横切る旅に出られるのか。「幹旋業者」の暴力にさらされるといふのに。強制送還されることもあるというのに。どうして、かれらの移動はとどまることを知らないのか。それどころか、その勢いを増し続けているではないか。「かれらは死を恐怖して逃げているのではない、むしろ死を恐れていない」。なんとか答えをひねりだすなら、こうだろうか。言い過ぎだろうか。だが、このような問いかけが私の脳裏に激しくこびりついてきたのだ。

もちろん、かれらの出身地域には、仕掛けられた戦争、収奪、暴力があり、生き延びるために、そこでの「苦悩」や「恐怖」から逃れようとしている。しかし、このように事態を理解するのみでよいのだろうか。こうした理解には閉じ込めきれない過剰なものがあるからこそ、私はそれによって急襲されているのではないのか。かれらの生が置かれた条件のみならず、かれらの生のただなかで、かれらの生それ自体が生み出している変移、運動に目を向けるべきではないのか。

こうした問いを考えるのに示唆的であ

「軍事地帯・接近禁止・武装による監視」と書かれた看板がある。だから、すぐ傍の海面に高く突き出した岩礁に登って、三〇メートルほど先の埠頭の様子をみることにした。

夜で暗かったとはいえ、その様子は、すでに見たことのあるものだった。移民たちは、かれらを救助した海軍や各種警

察に囲まれながら、埠頭で待ち受ける人道NGOやカトリック系の慈善団体に よって応急救護され、保護されている。子どももいれば、歩くのがやつとの人も いる。主流派メディアは、長年にわたつ て、繰り返しこの場面ばかりを報道し続 けてきた。その後、移民たちは、慈善団 体の用意したバスに乗せられ、「接近禁



止」の収容所へと連れていかれた。私は、歩いて町へと戻った。穏やかに涼しい夜だった。埠頭からほんの数メートルの距離なのに、明るい町はまったく別世界のように感じられる。この島自体が、移民たちとはまったく無関係なようにさえ思えた。ただ先ほどの埠頭の場面が、私の頭の中から離れることはなかった。ホテルに帰っても、日々繰り返されているあの場面に、なおも適切な表現を見出せない違和感が残り続けた。何より、島にたどりついたばかりの「密航者」たち、警察・軍隊と人道支援者に囲まれた「密航者」たちが、私の内側に侵入し、私の眠りを妨げていたのだ。正規の方法で入国できる自身の特権性を恥じたのか。きつとそれもある。しかし、このとき私を急襲していたのは、もっと別の問いであり、もっと別の情動だった。それらが、かれらの生、かれらの体現す

ると思い、私は一冊の本を翻訳した。イタリアの研究者サンドロ・メツザードラの『逃走の権利』（人文書院、二〇一五）である。著者は、移民・難民たちは、かれらの頭上で決定・展開されるグローバル化によって翻弄される「犠牲者」ではないとする。こうした生の表象こそが、救助と保護の見世物と化す埠頭の場面を可能としているのではないのか。死を恐れない生を、死を恐れる生とすることが、著者は、かれらの移動そのものによって創出されている別種のグローバル化、いわば「下からのグローバル化」に注意を促す。いかなる手段だろうと、どのようにに了解されようと、ランペドゥーザには、アフリカ大陸を通過し、国境をくぐりぬけ、地中海を横切る人たちが大量にやっできてきている。この島は確かに、かれらの生に体現された無数の運動によって、アフリカへ、サブサハラやアフリカの角へとつながっているのだ。

私の生は、合法／不法、善／悪、幸／不幸といった尺度では容易には測定困難な移民・難民の生と、それらが織りなす「下からのグローバル化」に、たとえどれほど微小だったとしても、確かに触発されたのだ。私はできる限りこの情動のただなかで、思考しなければならぬ。

発行日 平成28年3月
 編集兼発行者 後藤 基
 編集委員 山田 雄司、豊福 裕二、森 正人、堀内 義隆、グットマン・ティエリー
 発行所 三重大学大学院人文社会科学研究所
 〒514-8507 三重県津市栗真町屋町1577
 TEL: (059) 231-9195 (総務担当)
 URL: http://www.human.mie-u.ac.jp/chiiki/trio/
 E-mail: hum-somu@ab.mie-u.ac.jp
 写真 表紙: 六華苑 旧諸戸清六郎 (東諸戸邸) / 桑名市
 雑感: ハナミズキ / 撮影: 服部 範子 (人文学部教授・英語学)
 制作 株式会社コミュニケーションサービス

TRIO協賛企業

三重大学人文学部「TRIO」を応援しています。



編集後記

TRIO17号をお届けいたします。編集作業を通じてTRIOという大学院情報誌の特徴が改めてはっきりとした形で現れました。すなわち、3種類の執筆者が力を合わせてTRIOを誕生させているということです。大学情報誌である故に、まずは、教員が鼎談の企画、エッセイ、自らの著書の紹介等を通じて専門分野を背景にした学術的啓蒙に務めています。それに対して、社会人の方々ももう一つの執筆者のグループを構成しています。理論的な話を好む学者と違って社会人の方は実際の現場に根ざしている知識を提供して下さります。今回は三重県の観光の現実が描き出されたと信じています。大学という場所のもう一つの主役である学生達は3つめの執筆者のグループの構成員になっています。今号の場合、「桑名市の文化と社会」という人文学部の伝統的な地域調査を通じて大学院生達が新人研究者の腕を一般の方々にアピールしています。また、「桑名市」という共通のテーマのもとに扱われた題材の幅の広さから人文学部大学院の可能性を感じられるのではないのでしょうか。このような多様性に富んだ文書の形と中身を読者の方々に楽しんでいただくことが編集者の期待しているところです。

末筆ではございますが、鼎談にご参加いただいた方々、また数多くの興味深い文章をお寄せいただいた方々に、厚く御礼申し上げます。(G)



「ハナミズキ」 服部 範子

雑感

Unplugged: 1988年〇月×日(後編) 久間 泰賢

…電源を抜いたままの状態、下宿でエレキギターを弾きながら、このところ頭の中にあつた母音と色の関係について考えてみる。たとえば1の音を赤に対応させる考え方は、恣意的なものなのか。それとも根拠のあるものなのか。そもそも音声と色彩の両者は、どうやったら感覚の内部で連動するのだろうか。一時間くらいとりとめもなく考えてみるが、やはり見当がつかない。明日図書館で調べたら何か分かるだろうか。ふと、買っておいたCDをまだ聞いていなかったことを思い出して、封を切ってラジカセにセットする。聞き始めてしばらくすると、こちらがイメージしていた音楽とまったく違っていたことが分かって、がっかりした。ラジカセのスイッチを切る。ジャケットの色合いの鮮やかさに惹かれて購入したが、失敗だったか。いや、せっかくお金を払って買ったのだから、もう少し聞き込んでみようか。

風呂を出て寝床に入る。そういうえば、先週の授業で出てきた「唯物論」が、相変わらずよく分からない。この言葉の背後には、何となく広大な風景がありそうな予感がある。威圧感を与える言葉だ。それだけで反発したくなる。いや待てよ。これは、まさに『論語』に書いてあった、学ばずに考えている状態ではないか。明日こそは大学へ行かなくては。しかし授業に出ている間は、知識を詰め込むだけで、実際には何も考えていない状態が多いような気がする。何だか自分がダメな学生に思えてきた。こういう若き日の試行錯誤がいつか実を結ぶことはあるのだろうか。サリンジャーは隻手音声の公案を知っていたのだろうか。片手で拍手をすると、どんな色彩が目の前に現れるのだろうか。精神が色彩に染まることはあるのだろうか。思考の散乱はさらに著しくなり、彼は薄れゆく意識の電源を落とした。

人文学部准教授 インド哲学・仏教学 (きゅうまたいけん)

三重大学人文学部「公開ゼミ・公開講座」報告

三重大学人文学部では、今年度もまた、市民のみなさまを対象として、「公開ゼミ」と「公開講座」を開催いたしました。

人文学部の公開講座は、1986年9月に、生涯学習の機会を提供し、市民生活の向上に寄与することを目的として開講され、「国際化社会」、「地方都市」、「環境」、「結婚」、「食」、「家づくり」、「20世紀の総括」、「まちづくり」といったテーマを取り上げてまいりました。人文学部教員の研究実績を活かし、地域の方々にもその成果を還元するとともに、教員も地域の方々から多くのことを学ぶ機会の創出を目指したものです。毎年6-8回の連続講義の形式をとり、最終回はパーティーを行うなどして受講者と講師との交流を深めてまいりましたが、2005年度よりは、名称も「公開ゼミ」と改め、2014年度からは「公開講座」形式も再び採用し、「公開ゼミ・公開講座」として、人文学部の地域への窓口としてさらに発展させていきたいと希望しています。

「公開ゼミ」は、原則として受講生を20人までに限定し、少人数で行うことによって、質疑応答や文献の講読、討論なども交えながら、学ぶことを意図しています。一般学生向けの授業と同じように、90分を1回として、3回分をゼミの基本単位とします。「公開講座」は、教員の講義を中心としていますが、その道の専門家による「白熱」の講義をじっくり堪能し、しっかり学んでいただける機会と考えてお

ります。こちらは90分の講座が1回となります。

今年度は、4つの公開ゼミと5つの公開講座の開講となり、以下にご覧いただけますように、さまざまな学問分野の学びの場を提供することができました。中でも、学園祭期間中に行われた「三重大生と見る日本映画―核家族」「家族」「在日外国人」について考える―」は、映画鑑賞を題材として現代的な社会問題を考察するという新たな試みでした。市民のみなさまからは、4つの公開ゼミにのべ129名、5つの公開講座にのべ190名、全体としてはのべ319名の方々からお申し込みをいただきました。例年のように複数のゼミ・講座を活発に受講された方もおられますし、また今年度はじめて受講いただいた方もおられました。そうした受講生のみなさまのご感想から察するに、公開ゼミ、公開講座ともに、おむねご好評をいただいたものと感じております。

一方で、今年度もまた、開講数や開講テーマ、あるいはゼミの実施形態などについて大変貴重なご意見・ご要望を頂戴いたしました。大学の授業との兼ね合いから、そうしたご要望に十分にお応えすることがなかなか難しい状況ではありますが、来年度以降、できる限り創意工夫をこらし、地域のみなさまと人文学部の出会いの場として、公開ゼミ・公開講座をつくり上げて参りたいと思っております。今後も多くの皆様のご参加をおまちしております。

2015年度人文学部「公開ゼミ」・「公開講座」

公開ゼミ					
番号	講師名	テーマ	概要	日程	時間帯
1	赤岩 隆 (人文学部・教授)	アバウトヘイトとリベラリズム	強力なアバウトヘイトに対して、無力なりベラリズムがいかに立ち向かっていったか、アラン・ペイトンを例に取り上げ考える。	9月 9日(水) 9月16日(水) 9月30日(水)	10:30~12:00
2	山中 章 (人文学部・名誉教授)	古代木簡にみる王都の社会と文化	日本の古代王都からは膨大な数の木簡が出土している。いずれも古代史を書き換える大発見のものばかりである。三都を代表する木簡を通して往時の社会や文化に迫る。	10月21日(木) 11月 4日(木) 11月18日(木)	13:00~14:30
3	大河内 朋子 (人文学部・教授) 相澤 康隆 (人文学部・准教授)	三重大生と見る日本映画―「核実験」「家族」「在日外国人」について考える―	人文学部で学ぶ日本人学生や留学生といっしょに、地域住民の方々が日本映画を鑑賞し、その後、映画で扱われた社会問題(核実験・家族・在日外国人など)について、意見交換する。●11月20日(金)本多猪四郎「ゴジラ」(1954年)●11月21日(土)是枝裕和「そして父になる」(2013年)●11月22日(日)井筒和幸「バッチギ」(2004年)	11月20日(金) 11月21日(土) 11月22日(日)	13:00~16:00
4	前田 定孝 (人文学部・准教授)	災害時における自治体・政府の責任をどう考えるか	災害時は、自治体や政府への期待が一気に高まる時期である。それでは、自治体は何をしなければならぬのか?それまでの定型的な実務では追いつかないのは当然として、住民が求めることをなんでもやればよいというものでもない。このゼミは、このことについてどのような筋道を立ててどのように考えればいいのか提起するものである。	11月30日(月) 12月 7日(月) 12月21日(月)	18:20~19:50

公開講座					
番号	講師名	テーマ	概要	日程	時間帯
5	村上 直樹 (人文学部・教授)	前近代ヨーロッパにおける民間信仰―北イタリア・ペナンダンティ信仰の例―	近世北イタリアには、ペナンダンティ信仰と呼ばれる民間信仰が存在していました。この民間信仰は、古代の農耕信仰に起源を持つもので、やがてキリスト教からの働きかけによって消滅していくこととなります。本講座では、この民間信仰の概要とその消滅のプロセスをご紹介します。	9月 7日(月)	14:40~16:10
6	石井 眞夫 (人文学部・名誉教授)	境界に暮らす人々: アジア・オセアニア海洋世界の境界と民族誌	民族境界、領土・領海など現代社会では「境界」は重要な社会的意義を持ち、国際紛争の多くは境界問題に端を発するものです。国家利害の視点から離れ、そこに暮らす人々にとって境界とは何だったのか、現地調査の民族誌をもとに人類学の視点から「境界」について考えてみます。	10月 9日(金)	19:00~20:30
7	坂本 つや子 (人文学部・元教授)	予言の呪縛/野心の呪縛―シェイクスピアの悲劇『マクベス』を読む―	マクベスは魔女の予言を契機に、国王を殺し王位につくが、やがて先王の王子を擁護して蜂起した人々に滅ぼされる。ここでは予言と野心が主人公を呪縛し、破壊へと追い込んでいく過程を検証しながら、人間の心の奥底に潜む暗い力について考えていく。	10月16日(金)	13:00~14:30
8	小澤 毅 (人文学部・教授)	飛鳥の巨大古墳の被葬者を探る	本年1月、小山田遺跡(明日香村)で見つかった大規模な石敷きの濠と板石積みは、巨大な方墳の一部なのでしょう。近接する奈良県最大の方前方円墳、五条野丸山古墳(橿原市)とあわせて被葬者を探ります。	12月 2日(水)	14:40~16:10
9	グットマン・ティエリー (人文学部・教授)	脱成長経済: フランスにおける新政治思想と運動	欧米での認知度に対して、なぜか日本であまり知られていない「脱成長経済」という新しい思想とフランスにおけるその運動について語ります。消費社会・成長経済の否定を通じて真の環境保全を求め、「モノ」の減少、絆の増加を唱える人達の具体的な活動(政治マンガ・月刊誌等)を紹介します。	12月11日(金)	19:00~20:30